
一夜の魔法亭 ～ただ茶屋番外編～

ゆずはらしの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一夜の魔法亭 ーただ茶屋番外編ー

【Nコード】

N4014Y

【作者名】

ゆずはらしの

【あらすじ】

魔法小路のただの茶屋、番外編。まだ本編に出てきていない人が、出たりします。ややネタバレ注意。

エブリスタで「べにふうき」の名前で書いていたものです。

招待状は、突然に。 1（前書き）

まだ本編に出ていない人も出てきます。
2011年の夏至記念作品。

招待状は、突然に。 1

「今夜は、夏至のお祝いをするんですよ」

その日、ティラミスが店を訪れると、店主がそう言った。

「夏至？ お祝いつて？」

「昼が一番長く、夜が短い日。大気に魔法の力が混じる日でもあります。何かしておきたいと思う人は、わりといるんですよ」

そうだったけ？ とティラミスは思った。

「クリスマスとか、ハロウィンならわかるけど……」

「この辺りの人は、夏至も祝うんです。たぶん、夜の間中、騒がしいですよ。」

明日はだから、店が開けられないと思います。すみません」

「えー、それはかまいませんけど……どんな事するんですか？ ちよつとのぞいてみたいなあ」

「大したことはしませんよ。アルコールの入った飲み物や、腹にたまるような食べ物を用意しておくだけですから。」

あとは、やってくるお客が、歌ったり踊ったりしていますね」

「なんだか楽しそう。何時からですか？」

「七時ぐらいかな？ 日が沈んだら、始まります」

よし。今日は、夜にもこの店に寄ってみよう。と、ティラミスは思った。

* * *

夜。仕事を終えてから軽く食事をし、ティラミスは『ただの茶屋』に向かった。

この店はわかりにくい場所にあるらしく、ある時は、どうしてもたどり着けないのだが、
どうかすると、なぜ気がつかなかったのだろうと思うぐらい、あっさりと見つかったりする。

地図を書いてみても、そのとおりの場所で店が見つからない。自分には方向音痴の気があるので、そのせいだろうか、とも思う。
今夜も行こうと決めたものの、たどりつけくるかどうか、不安だった。

「招待状をあげますよ」

ティラミスが夏至のお祝いを見たいと言うと、店主はそう言って、手作りらしいカードをくれた。

スタンプを周囲に押して、飾りをつけたカードには、

『夏至のお祝い 招待状 『ただの茶屋』店主 紅』

とのみ書かれていた。

「ちょっとカワイイ。せっかくこういうカードもらったんだし、たどり着かないとなあ」

カードを取り出して眺めていると、ふと、周囲が暗くなった気がした。

「あれ？」

見回すと、道がなんだか暗い。窓から漏れる灯の色が、蛍光灯の光と違っていている気がする。

「あれ？　れ？」

街灯の光も、何だかゆらゆらとして……。

「あ、太陽電池のランタンだ！」

街灯は、クラシカルなデザインのものだった。装飾のあるランタンが黒い柱にぶら下がり、ゆらゆらと光を放っている。

似たようなものを、見たことがあった。太陽電池のランタン。

庭に置くタイプのもので、どこかへ出かけた時、庭に置いてあった。光にはゆらゆら揺れる効果がつけてあって、ロウソクの灯のようだった。

LED灯なので、蛍光灯の灯よりちょっと暗いが、風情があった。この辺りの街灯は、それを採用しているのだろうか？

「エコだ〜……」

すごいすごいと喜んでから、ティラミスは改めて、カードを眺めた。それから、ふと、前を見る。

「おばさま？」

スタイルの良いショートカットの若い女性が、ヒールの音をかつかつと響かせて歩いている。呼びかけると、立ち止まってこちらを見た。

「おや。外のお嬢さんではないか」

「外の？ 毎回言われるけど、良くわからないんですが、それ」

「外は外じゃ。どうした。こんな時刻に」

「あ、えと、お店に行こうと思って……でもあたし、迷いやすいんですよ。ちょっと自信なくて」

おばばは、ティラミスの方に歩いてきた。今夜は、オレンジ色のアンサンブルのスーツを着ている。シャーベットオレンジのワンピースに、ワンピースより一段強い色のボレロ風ジャケット。襟には大きめの花のコサージュ。華やかでいて、すっきりともいる。自分が着ている通勤用の、無難なモスグリーンのスーツがちょっと、恥ずかしくなった。

「招待状を持っておるのか。ならば、道は開いておるよ」

「えと？ あの、良かったら一緒に行ってもらえませんか？」

「かまわぬよ。わしも行く予定じゃ。ついておいで」

そう言つと、おばばはにつ、と笑つて先に立ち、歩き出した。

相変わらず、言い回しが古めかしい人だなあ、と思いつつ、ティラミスはあとに従った。

二人が立ち去った後、街灯の灯がゆらり、と揺れた。

ガラスで囲われたランタンの中には、電球は入っておらず、やわらかな色合いの丸い光の塊が、ただゆらゆらと揺れていた。

招待状は、突然に。 2

ほどなくしてティラミスは、『ただの茶屋』に到着した。店の中からは、光が漏れている。

「あれ？」

そこで首をかしげる。どうも、外観が違っているような気がする。

「どうした」

「え、お店がいつもと違う……気がして」

「そうじゃろうな。夏至じゃし」

夏至と何の関係が。

「夜に見ているからかなあ？」

お店に来るの、いつもは朝だし。とティラミスは思った。それにしても、

「あの、おばさま。なんか、お店が大きくなってません？」

「夏至じゃからな」

「窓の数が増えてるような」

「夏至じゃしな」

「屋根、あんなに高い所になりました？」

「うむ。正しく夏至じゃ」

だから、夏至と何の関係が。

「入るぞ」

「あ、はい」

首をひねっていたティラミスだったが、おばに言われ、慌ててステップを昇った。

階段には一段ごとに小さなランタンが置かれており、足元が暗くならないよう配慮されていた。

（あ、これ、さっきの街灯と同じだ）

ゆらゆらと揺れる、やわらかな光。

「店主さんも、エコですねえ」
「なんじゃ？ エコ？」

思わずそう言うと、先に立っていたおばばが振り向いた。ティラミスは言った。

「こんなにLEDのランタン集めるの、大変だったんじゃないですか？ まだそんなに普及していないし」

おばばは沈黙した後ティラミスを見つめると、「えるいーでいー？」とつぶやいた。

「前に見たことあるですよ、こついうの。LED灯って言うんでしょ？ 蛍光灯より柔らかくて、熱も少なくて済むから、エコなんですよ」

「明る過ぎる灯は、夜を傷つけるからの。それは、今夜のために客たちが集めたものじゃ」

「そうなんですか！ みなさん、エコロジカルな暮らしを心がけているんですね！」

「エコロジカルと言えばエコロジカルじゃろうのう。そりゃ、大気中の力を集めたものじゃから」

「大気中？ あ、太陽電池なんですね。自然な力を集めた感じですよね！」

「ああ、まあ、自然な力は集めとるわなあ」

おばばは片手でぱりぱり、と頭を掻いた。

「まあ、良いわ。ほれ、招待状は。中に入るのに必要じゃろ」
「あ、そうですね。ええっと」

ティラミスは、カードを取り出した。

「これ、受付の人に見せれば良いん……」

そこで動きが止まる。

（あれ？）

文面が、違っている気がする。

『夏至のお祝い 招待状 』 一夜の魔法亭』店主 紅』

「この店って名前、『一夜の魔法亭』、でした？」

おばばは、ん？ という顔をしてから、ああ、という顔になって
うなずいた。

「店だって、たまには名前ぐらい変えたいじゃろ」

「そういうものですか？」

「夏至じゃからな」

だから、なぜすべてが夏至で片づけられるんだ。とティラミスは思った。

ハロー、コスプレイヤー。 1

ティラミスとおばが店に入ると、中には既に、大勢の客が集まっていた。

「盛況じゃのう」

店の中は、笑い声とおしゃべりで満ちていた。

「お店の中もなんだか……違う？」

ティラミスはまばたいた。店の中が、いつもより広くなっているような気がする。

壁は、あんなに向こう側にあっただろうか。

柱は、こんなに本数があっただろうか。

天井が高い。梁の様子も違う。天窓。あんな所に窓なんてあったらろうか。

テーブルの数も増えているような。いや、絶対増えている。

奥にあるのは石造りの暖炉。本物の火が燃えている。けど。あんなの、この店にあっただけ????

「うむ、見事に夏至じゃな！」

だからなぜ、それで片づけるんだ、おばさま。とティラミスは思った。

「このお店にこんなに人がいるのを見たの、初めて」

疑問は尽きないが、おばさまからは、まともな返事は期待できないらしい。とりあえず店の様子は置いておいて、ティラミスは、集まった客を興味深げに見やった。

みな、きらびやかな衣装をまとっている。

「コスプレイヤー発見。すごいなあ。中世風の衣装。あの羽、どうやってくつつけてるんだろ」

集まった客の服装はまちまちだったが、ファンタジー風の衣装や中世ヨーロッパ風の衣装を着ている者が多かった。

知識はあまりないのだが、たつぷりと布地を取り、刺繍の入った服装は、何だかすごい。

魔女や妖精の姿の者もいる。なかなか楽しい集まりのようだ。

「あ、ここもあのランタンなんだ」

ティラミスは、やわらかな光に目をやった。街灯と同じようなデザインのレストランが、机や棚、床に置いてある。その灯が、店内を照らしていた。

客もみな、ランタンの光に彩られて、何となく夢の中の人物のような印象になっている。

「いらっしやい。二人で来たのですか」

店主が声をかけてきた。

「おお、そこで出会ってな。招待状は持っておったが、不安そうだったので、連れてきた」

「あー、はい。良く迷っちゃうので、不安で。おばさま、ありがとうございます」

おばが答え、ティラミスも付け加えてから、おばに礼を言った。

「招待状を拝見しますね。はい、ありがとうございます。」

あちらに、飲み物と料理がありますよ。セルフサービスですので、好きにつまんで下さい」

店主の言葉に見やると、大きなテーブルの上に大皿がどん、と置かれ、料理が盛られており、飲み物を入れたピッチャーやグラスも

置いてある。

「あ、あの、参加費とかいりますか？」

「あ、参加費はお金じゃないんですよ。それぞれのお客さんが持っている品を一つか二つ、いただいています」

「品を？」

「わしはこれを持ってきたよ」

おばばがそう言うと、きらきらした砂の入った瓶を取り出した。

「何の呪文です？」

店主が首をかしげる。おばばが答えた。

「ノミ除け、ゴキブリ除け、ハエ除け。ネズミ除けも入っとる」

「効くんですか？」

「失礼じゃな。一応、確かめたわ。それなりに効果はあったぞ」

店主がうなずいて、受け取っている。

「あたし、何か持ってたっけ……？」

ティラミスはバッグを引つかきまわした。その結果出てきたものは、コンビニで売っていたビタミンのタブレットが入った袋（二つほど食べた後のもの）と、入れたのを忘れていたハンカチだった。

「ええっと……こんなものじゃないんですが」

おそろおそろタブレットの袋を差し出すと、店主が破顔した。

「ああ、良いですね。いただいても？」

「あの、こんなので良いんですか？」

「十分ですよ。あ、あと、何か隠し芸みたいなの持ってます？」

「隠し芸!？」

「今夜集まった人には、それぞれ、得意分野の何かを披露してもらう事になっているんですよ」

え、なにそれ。とティラミスは思った。

「何もないければ、途中で入る歌のコーラスとかやっていただけたら

……」

「あ、それにします。カラオケは割と好きなんで」

「わしは駄菓子のショーをする」

胸を張っておばばが言った。駄菓子のショー？

「相変わらず、駄菓子スキーですね、おばさま……」
「楽しみにしておれ。ヒヒヒ」

店主の言葉に、見かけに似合わないイヒヒ笑いをしてから、おばは自分呼んでいるグループの方に歩いて行った。
友人らしい。全員が奇抜な角や羽をつけたり、真っ黒なローブをまとっている。

「コーラスとかもあるんですね」

「歌の得意な方が多いんですよ。古い歌ばかりなんですけど……わかるかな。いざとなったら、手拍子だけしてくれたら良いですかな」

「はい、わかりました」

「ダンスを披露する人もいますよ。楽しんで下さいね」

店主の言葉に何となくウキウキして、ティラミスは食事の置いてあるテーブルに向かった。

ハロー、コスプレイヤー。 2

* * *

料理は美味しかった。

「このカクテルも美味しい〜」

いつもはお茶とお菓子の店なのに、今夜は大盤振る舞いだ。たれをつけて焼かれたチキンやビーフの、ハーブの香りがたまらない。口当たりの良いカクテルに、つい、二杯、三杯とお代わりをしていると、

「そろそろやめておけ」

と、声をかけられた。

「あら、サー・ウィルフレッド」

むっ、と眉間にしわを寄せている男性は、以前、この店で出会っ

た『騎士』を自称しているコスプレイヤー。

金髪に灰色の目、がっしりとした体格の渋いハンサム。

けれど、自分を騎士だと言い張り、ファンタジーな衣装をまとってうろつく辺り、台無しだとティラミスは思っている。

ちなみに、呼びかける時には、『サー』をつけないと怒られる。どこまでこだわっているのだから。

彼は手に、ジュースの入ったマグカップを持っていた。

「あら？ ジュース？ そんなのもあったの？」

「スムージーとか言うらしい。向こうにある」

「スムージー？ 果物とかをミキサーでがーっと回して作るやつよね。飲みたい」

楽しくなってきたてきけら笑うと、「もう酔ってるのか」と呆れた顔をされた。

「酔ってません。ね、良かったねえ、サー・ウィル」

「なにがだ」

「だって、今夜はコスプレイヤー大集合じゃない。サーも浮いてないよ、そのカッコ」

ウィルフレッドはいつも通り、騎士の服装をしている。中世風ファンタジーな衣装は、布地のくたびれ加減や裾のほつれ具合などが、妙にリアリティを出している。

「その、こす、何とかは良くわかんが。これだけ色々なものが集まると、おまえの姿も目立たんな」

「えゝ？ あたしはフツ―ですよ」

「そんなに足を丸出しにした服装のどこが普通だ。はしたない」
「足い？」

ひよい、と座ったままで足を振り上げると、ウィルフレッドが慌てた顔になった。

「ばか、足を下ろせ！ 見える！」

「やだ、えっち」

「何が……ああ、もう。この酔っぱらいが！」

がしがし、と頭を掻くと、ウィルフレッドはマントを外した。それでティラミスの下半身をぐるぐる巻きにしてしまう。

「え？ へ？ なにこれ？」

「そうしておけ！ 若い娘が足を見せるな！」

何が何だかわからずマントを引っ張ると、怒鳴られた。びっくりして目を丸くしていると、マグカップを突き出された。

「飲め」

「あ、はい」

スムージーは冷たくて、すつきりする味だった。ぼんやりしていた頭もはつきりする。

「あゝ、これ美味しい……」

「酔いは醒めたのか」

「最初から酔ってません」。なんか、お客増えて来たね」

店の中が、混雑してきた。誰もが変わった衣装をまとっている。

「今夜は仮装OKだったの？」

「かもな。そう言えばおまえ、なにを代償に支払ったんだ？」

ウィルフレッドに尋ねられ、ティラミスはまばたいた。

「代償？ ああ、参加費？ ビタミンのタブレットだけど」

「びたみん、のタブレット？ 何かの呪文の石版か？」

「なんで石版なの。栄養剤よ。コンビニで良く売ってるたぐいのやつ。」

あんなので、本当に良かったのかしら」

「栄養剤……ああ。薬物のたぐいか。それは喜ばれるだろうな」

「薬物って、そういう言い方するとヤバイものみたいに聞こえるんだけど……喜ばれるの？」

「薬はどこでも貴重だろう」

「そうなの？　良くわからないけど。サー・ウィルは何を渡したの？」

ウィルフレッドは、苦虫をかみつぶしたような顔をした。

「新しい短剣を一つ、持って行かれた」

「短剣？　高いものなの？」

「さほど高くはない。だがな。騎士から武器を取り上げるなど……」

ああ、そつちで嫌だったのね。とティラミスは思った。いつも思うのだが、彼のなりきりぶりは見事だ。徹底している。

「んー、まあ、良いじゃない。今日は楽しく過ごす日でしょう。

美味しいものを食べて、楽しく騒げば良いのよ。短剣も、換え時だったのかもよ？」

「換え時？」

「うん。あたし、イヤリング良く落とすんだけど。片方だけね。二つそろってないと、使えないじゃない、イヤリングって。

で、がつくりくるんだけど。そういう時、こう思うことにしているの。

換え時だったんだ！　新しい、かわいいのを買っぞー！　って」

「騎士の短剣と、女の身を飾るものとを一緒にするな。しかし……まあ、わかった。そうだな。新しく、良い一品をあつらえれば良いか」

ウィルフレッドはそう言ってから、ティラミスの耳を見た。

ハロー、コスプレイヤー。 3

「そんなに良く落とすものなのか？」

「イヤリング？ まあね。だから安いのかつけないよ。今日のモ安物」

ティラミスは自分の耳に触れた。今日つけているのは、シンプルな金色のイヤリング。くると輪を作り、細い金属を編み込んだようなデザインになっている。

繊細な感じが何となく気に入って買った。色も渋めに抑えてあるので、あまり安っぽい感じにはならない。

さすがに仕事中にはつけないが、仕事が終わればちょっとつける。

「安物なのか？ 良い細工のように見えるが……こういうものは、俺には良くわからんしなあ」

首をかしげてから、ウィルフレッドは続けた。

「この耳飾りを渡せば、薬を渡さずとも良かったのではないか」

「ええ？ これワゴンで千円だったけど、タブレットは一袋五百円ぐらいよ？ コンビニのだし」

「ワゴン？」

「ワゴンセール」

「ワゴン……を、売るのか？」

「もう、なにボケてるのよ。店に売れ残った商品とかを安くして売

るやつじゃない。

ワゴンにざらっと乗せて、お客さんが一目で商品を選ぶようにしておくの。

あれ、考えついた人って、えらいわよね。ぱつと見て、何があるかわかるし。一つだけじゃなくて、ついつい、他のも買いたくなっちゃう」

ティラミスの言葉にウィルフレッドは首をかしげていたが、「そういうものか」とつぶやいた。

「女性（によしょう）の買い物は、俺にはさっぱりだ」

「うわあ、実感こもった一言。彼女に付き合わされたりしたことあるの？」

ティラミスが笑うと、ウィルフレッドはむっとした顔になった。

「母上と妹にだ。あれが良いこれが良いと、あちこちひっぱりまわされた挙げ句、最初の店に戻ってきて、とんでもない金額のものを買わされた」

「お気の毒さま」

財布扱いされたのか、とティラミスは思った。荷物持ちもさせられたんだろうなあ。力ありそうだし。

「どうしてああ計画的でないのだ、女性の買い物は」

ぼやくウィルフレッドに、ティラミスは苦笑した。

「サー・ウィルは、何を買うか決めるまで、じっくり考えるタイプなのね。それで目当てのものが決まったら、一直線でそれ買って、さっさと帰っちゃう感じじゃない？」

「それで問題はないだろう」

「うん、男の人ならね。でも、女の子は違うんですよー」

ティラミスはスムージーをすすった。

「どう違う」

「まずね。女の子……と言うか、女性の買い物っていうのは、目的が目的じゃないの。コミュニケーションの手段なのよ」

「コミュ……？」

ウィルフレッドが見かけによらず、外来語にとまどう事を知っていたので、ティラミスは言い直した。

「人間関係を円滑に……うまく形作る？ 交流って言うの？」

「買い物？」

「そうよ。お母さんと妹さん、品物を見たり選んだりしながら、いろいろしゃべってたんじゃない？」

「ああ、何やらしゃべりつづけていたな。良くわからんので聞き流していたが」

「サー・ウィルらしいわ……あのね。あれで、女性は人間関係を作ろうとしているのよ」

ウィルフレッドは眉間にしわを寄せた。

「意味がわからん」

「わからなくても、そうなの。いろんなものを見たり、聞いたりしたいのよ、女性って。」

だから気の合う人同士でしゃべって、自分の気持ちを確認したり。楽しいと感じる気持ちを長くつづけようとするの。

買い物も、何かを買おうとする、動機はあるけど。選ぶのが楽しいっていうのもあるから。その気持ちを長く続けようとしているのね。お互いにしゃべっていると、お互いの近況もわかってくるし。

それに、女性の情報収集能力って、馬鹿にできないのよ」

「そうか？」

「そうよ。どこのお店が安いか、どこのお店が美味しいか。

誰のところに子どもが生まれたか、誰の家族が病気になって入院したか。

うちの母見てるとわかるんだけど、一番早く情報が回るのは主婦なのよ。

特に美味しいお店の情報なんて、そこらのタウン情報誌より、よっぽど詳しいわよ。

子どもが病気になったら、どこの病院が良いか、どんな薬が良いか、そういう情報もすぐ回るわ。

男の人が気がつかない所、見ているのも、普通の家庭の主婦よ。どこの会社でも、主婦を馬鹿にする所は伸びないわ。主婦からの評

判が良くて、初めて業績が伸びるのよ」

ちよつと言ひ切りすぎかとも思ったが、ティラミスはそう言った。
ウィルフレッドはなぜか、真面目な顔で聞いている。

「そういうものか」

「そうよ」

「そう言えば、母上は、近隣のことです、思いも寄らない事を良く知
っていたりしたな」

「主婦だからでしょ」

ウィルフレッドは何やら考え込んでいる。

そこへ、店主がやって来た。

ハロー、コスプレイヤー。 4

「ティラミスさん、サー・ウィルフレッド。楽しんでいますか」

そう声をかけてから、下半身をマントでぐるぐる巻きにされているティラミスを見て、目を丸くする。

「おや」

「あ、紅さん。ごはん、すごく美味しいです。カクテルもジュースも！」

にこにこしてティラミスが言うと、店主は微笑んだ。

「もうじき、ナンが焼き上がります。待っていて下さいね」

「わ、楽しみ」

「サーには、そのパンを皿代わりになさって下さい」

店主はウィルフレッドにそう声をかけた。ウィルフレッドはうなずいた。

「うむ。菓子も良いが、料理もなかなかだな」

「ありがとうございます。ところで、その。マントをお貸しになったのですか」

「若い娘がそのような姿、あつてはならないだろう」

むつつりとした顔で言う男に、店主は軽く頭を下げた。

「気遣いを、ありがとうございます。ティラミスさん。サーの国では、女性は足を見せてはならないのですよ」

「ああ、そう言えば、そんなことも言ってたわね……でも、ちょっと動きにくいんだけど」

「しばらくそのままです。長いスカートを持てきます。

ここに集まるお客さまには、サーの国と同じ風習のかたが多くて、短いスカートだと、トラブルになる可能性もありますから」

「トラブル？」

「そのつもりはないのに、誘っていると思われたくないでしょう？」

「あー。いるよね、そういう勘違い男……うん、わかった」

ティラミスはうなずいた。外国人が多く、風習の違う人が多いというのなら、譲歩するのが良いだろう。

「あ、でも、おばさまは？ あの人もスーツだったけど。スカート短くない？」

店主はすると、ちょっと遠い眼差しになった。

「あの人はまあ、良く知られていますので。どのような格好をしたところで、さしてトラブルにはなりません。

では、サー。申し訳ないのですが、彼女と一緒にいていただけですか。

一応、今夜は何も仕掛けはしないという約定になってはいますが……羽目を外す者がいないとも限りません」

「あいわかった」

重々しい感じにウィルフレッドがうなずいた。ティラミスは首をかしげた。

「仕掛け？ 約定って？」

「いろいろな国の人が集まるので、仲の良くない者同士が出くわしたりもするんです。

だから集まった人たちには、夏至の祝いの間、店の中ではケンカはしない、悪さはしないという約束を、あらかじめいただいています。

ですがまあ、どこにでも、悪さをしたがる人はいますから」

そうなのか、とティラミスは思った。

「大人しくして、早めに帰るのが良いだろうよ」

ウィルフレッドが言う。その言い方がことなく上から目線に思えて、ティラミスはちょっと、かちんときた。

「なにその、自分の方が良く知っているみたいな態度。ワゴンセー
ルも知らなかつたくせに」

「騎士が知らずとも問題はない」

「むかつく〜!」

「ティラミスさん。サー・ウィルフレッドは、ここに集まる人のこ
とは、あなたよりは良くご存じです。」

海外では、何気ないことがタブーに触れたりすることもあるでし
ょう？

常識の違う人が、たくさん集まっているのです。どうか、できる
だけ一緒にいて下さい」

言い返そうとしたティラミスだったが、店主にそう言われ、仕方
なく黙った。確かに、外国の人にとって何がタブーに触れるのか、
自分ではわからないことも多い。

「それにしても、ワゴンセール……?」

店主が首をかしげる。

「何やら説明された。女性の情報収集能力についても、解説され
たぞ」

ウィルフレッドが言う。店主はまばたいてから、そうですか、と

言った。

「確かに、家庭の主婦の情報網はすごいですからね……」
「そうなのか」

店主にまで言われ、ウィルフレッドは驚いたようだ。

「女性はものの捉え方が、男性とはかなり違いますからね。情報量は女性の方が多いと思いますよ。思考が横につながりますから」
「横？」
「横？」

ウィルフレッドは首をかしげたが、ティラミスもこの表現に同じく首をかしげた。

「女性のおしゃべりを聞いていると、話題がくるくる変わっているように聞こえるでしょう？」

あれは、一つの話題から連想されるものを、同時進行で考えているんですよ。

で、結論は別に、出なくても良い。
女性の場合、話している時間が楽しければ、結論は別になくても良いんです。

もっとも、そういう人ばかりだと、何かを決める話し合いでは、ぐだぐだになってしまったりするんですが」

「話し合いで結論がないのは、どうしようもないだろう」

「男性はそうですね。目的を果たすために話し合いをしますから。でも女性のおしゃべりの場合、お互いの感情と情報を共有することに目的があるので、結論は目的ではないんです」

「そうなのか？」

ウィルフレッドがティラミスに目をやる。ティラミスは目を白黒した。

「ええ？ え？ 良くわかんない」

店主の言葉が難しくて、ティラミスは、何が何だかという状態だった。

「女性であるこれは、こう言っているぞ」

「誰でも自分のことは、良くわからないものですよ、サー・ウィルフレッド」

くすりと笑ってから店主は、「おしゃべりをしていると、しゃべっているのが楽しくて、とにかくしゃべりたい、という気持ちになりませんか」とティラミスに言った。

「ああ、そう。そうです。別に、何がどうってわけじゃないんだけど……しゃべって、笑っていたら楽しいから」

「目的なくしゃべるのは、それでか……付き合わされるこちらは、

神経がすり減るような気がするが」

何やらウィルフレッドは、げっそりしたような顔になった。母親と妹に、相当振り回されているのだろうか。

魔法使いと、るねるねるね。 1

* * *

店主が持ってきてくれたのは、鮮やかな色の巻きスカートだった。

ティラミスは礼を言って受け取り、その場で巻き付けようとし、ウィルフレッドに叱りつけられた。足を見せるのが、とにかくいけないらしい。

店主に手洗い所に案内され、マントを巻き付けたまま、ちょこちょこした足どりで歩く。

物陰でマントを外し、巻きスカートを巻き付けて、あたし、何やってるんだらうという気分になった。

（なんか、あたしもコスプレしてるみたい……）

それでも、外国人だらけの店内を見て、マナーが違っただろうと自分を納得させ、ティラミスはウィルフレッドのマントをたたんだ。マントは古びており、あちこちがほころびている。色もねずみ色と言っか、薄汚れた感じた。

「洗濯、してないのかな。洗ったら、水がすごい色になりそう」

このマントが家にあれば、自分はぼろとして捨てるだろう。

「まあ、でも、男の人って、変なものに思い入れして、記念にしたりするしなあ」

初めて運転した車のワイパーだとか、切れたベルトだとか。がらくたにしか見えないものを、後生大事に持っていたりする。父がよい例だ。ゴミだと思って捨てようとした母との間で、大騒ぎになったことがあった。

「うん」

けれど、ウィルフレッドが自分を気にかけてくれ、目立たないように守ってくれたらしいことは、確かだ。

俺さまな性格な男だし、自称『騎士』なコスプレイヤーだが。それでも、お礼を言うべきところでは、言わないと。

「洗ってあげようか。それぐらいはしても良いよね」

そうつぶやいて、ティラミスは、ウィルフレッドのいる所へ戻ろうとした。そこで、声をかけられる。

「おや。おや。外の匂いがする娘さんだね」

ティラミスがそちらを見やると、背の高い男が佇んでいた。

肌の色は異様に白い。というより、青白い。黒い髪をぞろりと伸ばし、ずるずるしたローブをまとっている。

顔たちは悪くはないのだが、薄青の目は、どこか焦点が合っていない感じで、なんとなく気味が悪いと感じてしまう。

「魔法使いのコスプレイヤー……」

思わずつぶやくと、男は首をかしげた。

「わたしは魔法使いではあるが、こす、ぷれ？ とは何のことだ？」

なりきり屋さんがここにも。

ウィルフレッドの対応で免疫のついていたティラミスは、「いえ、こちらの話です。別になんでもありません」と言っただけ。

こういうなりきり系のコスプレイヤーに、下手に何か言おうものなら、怒り出したり、長々と妙な説明をされたりして、大変なのだ。ウィルフレッドで身に染みている。

「ふむ。外のお嬢さんは、何を代償にここに入ったのだね」

「代償って……参加費でしょう？ あたしは、ビタミン剤のタブレ

ットを……」

「なに。なんの石版だって？ どのような魔術のたぐいだ」

いきなり、身を乗り出された。

「ま、魔術って、そんなのじゃないです、あの。薬です。栄養補給用の」

「ほう？ 薬物か。それは良いな。どのような作用のものなのだ？」

自称『魔法使い』の目が、らんらんとしている。なんだろう。危ない気がする。

「さ、作用、……あの。ただのビタミン剤で。えっと」

ビタミンの作用ってなんだっけ？

「おまえが作った薬なのか？」

「とんでもない！ あたしは買ってきただけで」

「ほう。それで、びたみん、というのは？」

「え、えー、えーと」

おろおろしていると、誰かにぐい、と肩をつかまれた。そのまま引っぱられる。

ひゃつと悲鳴を上げたが、気がつくと、ティラミスはウィルフレッドの背中を見ていた。

「このものに、何か用か」

目つきの危ない自称『魔法使い』に、自称『騎士』が問いかける。背筋はぴんと伸びており、腹に響く低音の声に、ティラミスはうつかり、

（カッコイイ……）

と、思いかけた。思ってしまったてから慌てて首を振ったが。ダメだ。なりきりコスプレイヤーを、かっこいいなんて思ってた。うするんだ。

「薬物について質問してただけだ」

男はウィルフレッドに、どこか下に見るような、嫌なまなざしを注いで言った。しかしウィルフレッドは、まるで取り合わなかった。静かに言う。

「これは店主の個人的な知り合いだ。そちらの好奇心を満たすよう

なものは、何も持っておらん」

「そうかね。騎士とは律儀なものだな」

嘲るような笑い声を上げてから、魔法使いの姿をした男は、ティラミスに目をやった。

「外の匂いのお嬢さん。良い守り手がいて幸いでしたね。
びたみん、とやらには心が残りますが、ここはその騎士の顔をたてて、退散しましょう」

そう言つと、するり、と身をひるがえし（本当に、するり、としか表現できない、へびめいた動きだった）、人込みの中にまぎれてしまった。

ウィルフレッドはしばらく、男の後ろ姿を見つめていたが、ティラミスのほうに向き直ると、むっつりした顔で言った。

「なんの話をした」

「なんの……って。別に何も」

「何か渡したか。品物や、名を交わしたりしなかったか」

「え、え？ 何も……名前って？」

「あの男に名乗ったか。自分の名を」

「え？ そんなことしてない……それがどうかしたの？」

ウィルフレッドは、ふー、と息をつく、ティラミスの腕をつか

んだ。

「行くぞ。おまえは危う過ぎる」

「え？ えっ、ちよっと！ なんなのよ、ちよっと〜！」

ぐいぐい引つ張られて、食事の置いてあるテーブルに連れて行かれ、ティラミスは憤慨ふんがいした。なんなんだ、この強引男！
かつこいいなんて、ちよっとでも思っくんじゃなかった！

魔法使いと、•るねるねるね。 2

* * *

店は、さらに、にぎやかになってきた。

ふわあ、とティラミスはあくびをした。ヘビのような自称『魔法使い』との出来事以来、ウィルフレッドはティラミスの側に、ずっとついている。

知り合いもそんなにいないので、ティラミスは仕方なく、テーブルでひたすら食事をし、飲み物を飲んでいた。
突然、わっ、と歓声が上がる。

「あ、おばさまだ」

店の中、少し高くなった場所に、オレンジのスーツをまとったシヨートカットの女性が立っていた。胸を張って何かを取り出している。

「今から、駄菓子ショーをするぞい！」

おばばはバケツのような器を取り出すと、中に何かをさらさらと入れ始めた。小さな袋を破いては中身を入れ、破いては中身を入れ、としている。

「駄菓子……」

なんだか見覚えがあるような、ないような。

「おばさまは、ああいうの好きですからねえ」

不意に、そういう声がした。振り向くと、若い男性が立っていた。人の良さそうな顔をした、二十歳かそこらぐらいの青年だ。

肩幅があって体格はそこそこ良く、髪は短く刈り上げられていて、スポーツやってました！と言われたら、そうかと思ってしまいそうな感じである。

彼は白い割烹着を着て、パンを山盛りにした籠を持っていた。

「パンの追加、焼き上がりました。どうぞ」

「美味しそう！」

思わずにつこりしたティラミスに、彼はちよつと首をかしげた。

「あゝ？ あれ？ あなた、外の人？」

「外？」

「あ、いや、……なんでこの店に？　ここってマニアックでしょう、いろいろと。良く入れましたね」

ウィルフレッドは、最初こそ警戒するような目をしたものの、すぐに体の力を抜いた。籠からパンを取り出して、サラダや肉料理を乗せ、もくもくと食べている。

「紅さんに、招待状もらったんです」

「そうなんですか。えっと、……隣はサー・ウィルフレッドですよ。ね。サーはどうして」

「店主に、この娘の側にいると頼まれた」

ぼそつと答えたウィルフレッドに、青年は、ああ、と言ってうなずいた。

「それが良いですね。ぼくも、紅さんも、厨房とここと行ったり来たりで、そんなに気を配れないから」

「あの？　あなた、このお店の人？」

「臨時で手伝いに来てるんです。ぼくは、パンを焼いていて。この店にパンを卸してるんですよ」

青年は、にっこりした。

「サー、申し訳ないのですが、彼女に紹介してもらえますか。その方が安全だと思います」

ティラミスは、はい？ と思った。なぜ安全？

しかし、ウィルフレッドの感想は違っただけ。眉を上げてから、ふうと息をつく、面倒くさそうに、

「この男は、じんと言つて、パン職人だ。

この娘は、ティラミスとか言っらしい。店主の知り合いだ」

と、棒読みのように言つて、再び食事に戻ってしまった。

「えー……なんなの、それ」

ティラミスが、怒れば良いのか、呆れば良いのか、という顔を
していると、じんが苦笑した。

「いえ、まあ、……だれが聞き耳をたてているのか、わかりません
からね。今夜は、これだけの者が集まつてゐるし。

自分で名乗るのは、よっぽど自信があるか、力のあるものだけ……

……って、えーと、わからないか。

うーんと……ここに集まった人たちにとっては、自分で自分の名前を言うのは、かなり、目立ちたい人だけなんですよ」

「そうなの？」

「ええ。誰かに紹介してもらうなら、問題はないんですが」
「そうなんだー……」

いったい、どこの国の習慣なのだろう。そう思ったが、とりあえず、そういうものらしいとティラミスは思うことにした。

「まさかと思いますが、誰かに名乗ったりしました？」

「え？ ううん、誰にも」

「それは良かった。今夜はサーと一緒にいて下さいね」

「????」

「子守をさせられるとは思わなかった」

むっつりとした顔で言う男に、ティラミスは眉を釣り上げた。

「ちょっと、なによそれ。失礼な」

「そのままの意味だ。この娘、魔法使いと会話していたのだぞ、一人で」

じんが、げっ、と奇声を上げた。

「え？ なに？ あの危なそうな人がどうかしたの」

「いや、危なそうって……危ないですよ！ なんでこの人を一人にしたんですか、サー」

「目を離れた隙にだ。それから張りついている」

「ああ、……うわー……、良かった……あぶねー……」

頭を抱えてぶつぶつ言う青年を、ティラミスは妙なものを見るような目で見た。なにがなんだかわからない。

「あのですね、ここにくる人、良い人ばかりじゃないんですよ。うっかり名前を知られたら、悪さ始めるような人もいます。

サー・ウィルが大丈夫と判断した人なら、まあ大丈夫だと思いますから……自分で名乗ったりしないで、紹介を待って下さいね」

ティラミスの表情に気づいたのか、じんはまごついたような顔をした後、そう言った。

「釣りとかそんな感じ？ 業者とか紛れ込んでるの？」

「えっと……まあ、……そんな感じです」

「やだ、サイテー。わかったわ、自分からは名乗ったりしないわ」

じんは、複雑そうな顔をしてから、うーんとうなった。

「この人、妙に運が強かったりします？」

こそつとウィルフレッドに問いかける。

「かもな。店主はとにかく、側にいると言っていたが」

「基本的なことがわかっていないのに、危険は回避する感じですよ
ね……」

「ある種の才能だろう」

二人でひそひそと話している。

「ところで、魚釣りがどうかしたのか。業者というのは？」

「あゝ、ええと、こちらの用語です。」

業者…… ってのはまあ、たちの悪い魔法使いみたいなもので。

釣りっていうのは、…… ケータイ番号…… ええっと。名前をうまく聞き出そうとする行為を、その「

「スラングか。何となくわかった」

うなずく二人に、ティラミスはなんとなく、疎外感を味わった。
なによ、もう。二人で分かり合っちゃって！

そのときまたもや、わっと歓声が上がった。

「ほれほれ。ねるねる、ねるねる」

『ねるねる、ねるねる』

「もう一つおまけに、ねるねる!」

拍手喝采。

なぜだ。

「あれって、『るねるねるね』じゃない……?」

ぼーっとその様子を見ながら、ティラミスが言った。

「あー、そうですね。『るねるねるね』、ですよ、どう見ても。量が尋常じゃないけど」

じんが同意する。

「なんだその、ね、ねる? ねるねる、とは」

ウィルフレッドが首をひねった。

「駄菓子よ」

「駄菓子ですね。子どもが喜ぶたぐいの」

ティラミスとじんの二人が答えると、ウィルフレッドの眉間にしわが寄った。

「あんな怪しげなものを、子どもが食べるのか」

「いや、あれは量がものすごいから、怪しげに見えるだけ……じゃ、ないのかな？ ひょっとして」

じんが否定しようとしたが、ねりねりしているおばの姿に、否定しきれずそう言った。

「ちよびつとなら、そんなに怪しくないけど……良く考えたら、怪しいお菓子よね、あれ。どうしてあんな風に練る必要があるのかしら」

『ねるねる』と合唱する周囲の熱気も合わさって、ものすごく怪しい。

「何かの呪術のようにしか見えんぞ」

ウィルフレッドがしごく真面目な顔をして言った。ティラミスも
じんも、思わず納得しそうになった。

「ひっひっひ！ ほうれ。ねるねる、ねるねる！ わが生
涯に、一片の悔いなしじゃー！」

なぜかハイテンションで、おばばが笑う。

おばばの駄菓子ショーはそうして、拍手喝采のうちに、幕を閉じ
たのであった。

魔法使いと、•るねるねるね。 4

* * *

その後、ねりねりされた駄菓子は、一口ずつ配られた。

「……………」

ウィルフレッドは、渡された物体を眺めたまま、動かない。

「あの、……たぶん、そんなに変な食べ物じゃないから」

ティラミスがなだめるように言った。じんは厨房に戻ってしまい、ここにはいなかった。

「本当に食えるのか。これは」

「子どもが食べるものだから」

「口にした途端、体が虹色になったり、トサカが生えたりせんだらうな」

なぜ、トサカ。

「なんじゃ、失礼な若造じゃのう。わしがねりねりした駄菓子じゃぞ。」

そんなけつたいな効果をつけるわけがなかるう」

そこで、声をかけた者がいた。オレンジ色のスーツ。

「おばさま」

「おう、外の。わしの駄菓子ショーはどうじゃった？　なかなかであつたろ？」

「えーと、……熱気がこもってて、面白かったです」

この流れで怪しかったとは言えず、ティラミスはそう言った。実際、面白かった。大喜びで盛り上がっている人を見ると、笑いだしたくなるような面白さを、確かに感じたのだ。

「そうじゃろ。楽しく過ごすために持ってきたからのう」

かかか、と笑っておばは、ウィルフレッドが持ったままの駄菓子子をひよい、と取り上げた。

それから男の顎をぐっ、とつかむと口を開けさせ、中身をばいと放り込むと、無理やりしめた。

「！　！　！」

ぎょつとした男がふごふご、うーうーとうめいているが、気にした様子はなく、あいた方の手ではこつ、と頭をなぐる。

ごくり。

はずみでウィルフレッドの喉が動いた。

「あ

飲み込んだらしい。

「ひひひ。うまかう。わしが手ずからねりねりしたのじゃ！」

得意気に言つて手を離れたおばばに、ウィルフレッドは口元を押さえ、恨めしげな顔で体を丸くした。

「おばばさま、そんな、いきなり飲み込ませるなんて。喉につめたらどうするんですか！」

「おー、そうじゃの。危なかったかの？　ほれほれ。飲み物ならあ

るぞ」

そう言っで、おばばはカクテルのグラスを差し出した。しかしウィルフレッドは恨めしげな顔をするばかりで、受け取ろうとしない。

「サー・ウィル、大丈夫……、お酒じゃだめよ。あたし、水もらってくる」

ティラミスはそう言っで立ち上がり、厨房に向かって走った。

後ろでおばばとウィルフレッドが何か言っ声がか聞こえたが、とにかく水をもらおうという事しか、ティラミスの頭にはなかった。

あれ？ 不穏？ 〱夏至の夜と炭酸。 1

* * *

めまいがした。そう思った。

「あれ？」

気がつくくと、ティラミスは厨房ではなく、店の外に出ていた。暗い通りにはぼんやりと街灯の光がさしており、人氣がなく、どこかぞっとするような気配が、静かにたゆたっていた。

「なんで、外……？」

慌てて店内に戻ろうと、きびすを返した時。腕を誰かにつかまれた。

「ひっ、」

驚いて立ち止まると、ふーっ、ふーっ、と荒い息が聞こえた。つ

かまれた腕に、ぎりぎりとかかる。

痛い。

「ちょ、放して！ なんなの！？」

これは、あれだ。

暗い道で背後からいきなり現れて、
逃げようとしたものを捕まえる……

女性の敵。変質者！

つかまれた腕を振りほどこうとしたが、強い力がかかって外れない。痛くて涙が出てきた。

「だれか、たす、」

助けて、と言おうとしたが、そこで言葉が途切れた。声が出ない。
どうして？

ばたばた暴れて逃げようとするが、背後にいる誰かはのしかかるようにして、ふーっ、ふーっ、と息を吹きかけてきた。
生臭い息に、吐き気がしそうになる。

げっ、げっ、という声がして、背後の男が何か言った。

『ナノレ』

えっ、なに？ とティラミスは思った。

『ナヲ、ナノレ』

名前？

どうして、と思い、店主やウィルフレッド、じんの助言を思い出す。この変質者、

釣りをする業者なのね！

冗談じゃない。

ティラミスの脳裏に、ワイドショーなどで伝えられる、業者の釣りメールにひっかかった人たちの末路が浮かんた。

変なメール攻撃やいらぬ商品の案内が山ほど送りつけられて、ノイローゼのようになったり、ストーカーまがいの売り込みで、貯蓄をむしりとられた人々。

冗談じゃない。

ほんとに、冗談じゃないっ！！！

「地道に稼いで貯蓄を大切に、一般庶民の幸福を踏みにじるとは、

恥ずかしくないのか変質者……！」

怒りのあまり、声が出た。

「本当ですね。このような暗い夜道で女性に手を出すとは、まさに変質者」

そう言う声がして、ティラミスは顔を上げた。目の前に、店主が立っていた。

なぜか、水の入ったピッチャーを持って。

「紅さん！」

「彼女を放しなさい。協定違反で訴えられたいのですか、ルーザード」

店主の言葉に、背後の男が笑う気配がした。

「協定には違反していない。この女は自分から外に出た。店の外に出たなら、協定からは外れる」

「そのように解釈したのですか。ですがそれは、間違いです」

店主は手にしたピッチャーを構えるようにした。背後の男がなぜか、慌てる気配がした。

「なんだと？」

「彼女は、わたしの招待客。もう一つ、彼女にはまだ役割があって、それを果たしていないのです。

ですから彼女はまだ十分に、店の客なのですよ。たとえば、店の外に出たとしてもね。

手を放しなさい、ルーザード。この店の客に手を出すことは、誰であろうと許しません」

動物のような、唸り声が聞こえた。

次の瞬間、びしゃっ！ と水がかかり。ティラミスがびっくりしている、背後から、ぎゃんっ！ と、犬の悲鳴のような叫びが上がった。

えっ？ と思った時には、腕が自由になっていた。

ティラミスが振り向くと、そこには黒い、大きな犬がうずくまっていた。

なぜか、ぶすぶすと煙を上げながら。

「え？ ええ？ ワンちゃん、どうして煙……、あ、あの変質者は！？」

ティラミスは周囲を見回した。

「力づくで名前聞き出そうなんて、なんなの、ヤクザ？ やばすぎるんじゃないの、あの業者！」

「業者と言えば業者なんでしょうねえ……」

そう言うと、店主は持っていたピッチャーを揺らした。ちやぶ、と水の音がした。

「ティラミスさん、店の中へ。濡れてしまいましたから、じんさんにタオルをもらって下さい。」

そろそろ、歌が始まりますよ。コーラスをお願いしますね」

「へ？ え？ あ、はい」

店主が少し、立っている位置をずらすと、背後に扉が見えた。

「あの、ここって？」

「裏口です。すぐ厨房に入りますから。怪我はありませんでしたか？」

「えと、腕が」

ティラミスが腕をさすると、店主の眉が上がった。なぜか、煙を上げている犬がびくりとした。

「怪我を？」

「えーと、……あざになったぐらい、です。ちょっとまだ痛い……」

店主は無言で、ティラミスの腕を取った。強く握られて赤くなっているそこを見ると、黙ってピツチャーの中身の水を注いだ。

しゅわー。

煙が出た。水の当たった所から。
しゅわー、と言いながら泡を出すそれを見つめ、ティラミスは首をかしげた。そうして、言った。

「炭酸？」

「そのようなものですね」

店主がうなずく。

「え、でもなぜ炭酸を、腕に？」

「炭酸水は、肌に良いんですよ。化粧品にありませんか？」

「え、そうだっけ？」

「傷口にはしみるから、使わない方が良いでしょうけどね」

しゅわしゅわー。

店主は炭酸水らしいそれを、次々とティラミスの腕、肩、などにかけた。泡と煙が出る。

「中に入ったら、おばさまに事情を話して、一度見てもらって下さい」

「え、おばさまって、怪我の手当てとか得意なの？」

「ええ、まあ。どうぞ、中に」

店主にうながされ、ティラミスは疑問ももたず、裏口から店の中に戻った。背後からなぜか再び、『ぎゃんっ!』という犬の悲鳴が聞こえてきたが、

「紅さん？ 何かあったの？」

と、声をかけると、

「なんでもありませんよ」

という返事があったので、深く追求しない事にした。

「そう言えば、変質者は逃げたのかしら？」

うやむやになってしまったが、どうなのだろう。どうも店主の顔
見知りのようだ。

あんな変質者を店に入れて、大丈夫なのだろうか。

あれ？ 不穏？ 〱夏至の夜と炭酸。 2

* * *

「なんともまあ」

おばばは先ほどから動かず、同じ場所にいた。
ウィルフレッドはもう妙な顔はしていなかったが、戻ってきたテ
イラミスが濡れているのを見て、眉をしかめた。

「なにがあつた」

事情を話すと、二人して、何ともいえない表情になった。

「変質者は逃げたみたいだけど、紅さんが、おばばさまに怪我を見
てもらえって」

「ああ、まあ、変質者ね。その犬はそれで、どうなったと？」

「さあ？ ぎゃんって悲鳴が聞こえたけど……」

「自業自得じゃな」

ぼそりと言うと、おばばは、ティラミスの全身に目をやった。ウ

イルフレッドはおばに問いかけた。

「何かつけられているか？」

「いや、大丈夫じゃ。紅どのの対応が良かったのじゃろ。しかし、何を投げつけたんじゃ、あの御仁は」

おばは眉を寄せてティラミスの髪をひとふさ、指にからめた。濡れているそれを見つめ、ふーむ、とうなる。

「わしの渡した魔よけとは違うぞい」

「店主どのの独自の呪文か？」

「いや、これは……」

二人でぼそぼそと話し合う。内容がよくわからない。

「あの変質者、業者なの？ ルーザードって紅さんは呼んでたけど」
「ルーザード……ああ。あれか」

ウィルフレッドが得心したという顔をした。

「知ってるの？」

「知ってるもなにも……さっき、おまえに話しかけていただろう。魔法使いの男だ」

ティラミスの脳裏に、へビのような動きをする、やたらと青白い顔の男の姿が浮かんだ。

「やだ、あれってやっぱり業者なの？ 魔法使い気取りで痴漢するなんて、サイテー。」

オタクのコスプレイヤーでしかも業者って、どうしようもなくな
い？ 痴漢撃退法とか習っておけば良かった！」

憤慨するティラミスに、おばばとウィルフレッドは顔を見合せた。
それからなぜか、ウィルフレッドはため息をつき、おばばは生ぬ
るい笑みを浮かべた。

「なんですか？」

「いや、面白いのう、おまえさん。これほど見当がずれておるのに、
本質はしっかり掴んでいる人間など、滅多におらんわ」

「はあ？」

「まあ、痴漢撃退については、相手が逆上することもあるでな。し
っかり学んでおるならともかく、付け焼き刃は危ないぞ。」

そういう時には、ここにいる男のような、叩いても蹴飛ばしても、
壊れそうにない男を利用するが良い」

「俺に子守をさせ続けるつもりか」

「騎士なんじゃろ、おまえさん。か弱い女性を守るのもつとめじゃ
ろうが」

けけけ、と笑っておばはウィルフレッドの肩をぱしん、と叩いた。

ウィルフレッドはいやそんな顔をしたが、ティラミスの目線に気づいて息をついた。

「店主どのから頼まれているからな。ここにいる間は、面倒を見てやる」

「その言い方って……」

むっとしてティラミスが言うと、ウィルフレッドは続けた。

「ルーザードのような輩は、いくらでもいる。おまえでは区別がつかんだろう。良いから、俺の側にいろ」

「ひゅーひゅー」

おばはがなぜか、にやにやしながらそう言った。口笛ではない。思い切り言葉で言う「ひゅーひゅー」である。

「若いものは、良いのう」

「そういう話ではないだろう」

「ひひひ。そういう話じゃわな。今夜は夏至じゃしな」

だからなぜそうも、要所要所で『夏至』の一言を持ち出すんだ。と、ティラミスは思った。

やだちょっとカワイイ。くワンちゃんと炭酸。 1

* * *

豎琴^{たてこ}の音^ねが響いた。

ほっそりとした、長い髪を垂らした女性たちが、歌声を響かせる。そのハーモニーの美しさに、ティラミスはうっとりとした。

（キレイ……。妖精みたい……）

白いローブをまとった女性たちは、どこか人間離れして見えた。美しい歌声と相まって、物語りの中の人物のように見える。

聞いたことのない旋律、聞いたことのない言葉だが、歌はひどく心をつかんだ。聞いていると、優しいそれに慰められ、癒されているような気持ちになる。

やがて歌が終わり、拍手が起こった。ティラミスも一所懸命、手を叩いた。

「次は、……バグパイプの演奏じゃのう」

おばばが言った。

「その次が、合唱じゃな。おまえさんも出るんじやろ」

おばばに言われ、はたとなる。

「歌うのか」

ウィルフレッドに言われ、慌てる。次？

「え、え、あたし、えと？」

「合唱は、みんなで歌うためのものですから。手拍子を入れたり、繰り返し部分を歌ったりしてくだされば良いですよ」

おろおろしていると、そういう声がした。振り向くと、店主がいた。

なぜか、ピッチャーを持ったまま。ついでに首輪をつけた黒い犬を連れている。

犬は口輪をつけられており、耳も尻尾も垂れ下がった情けない状態で、しおしおとした風に歩いていた。

ウィルフレッドが能面のような顔になった。おばばが、げふつ、と変な声を出した。

「ぐ、ぐふつ、そ、それは、紅どの、ぐ、ぐっじよぶ、ぐっじよぶ

じゃ〜！」

親指を立ててそう言つと、おばばは涙を流して笑い始めた。
ウィルフレッドは能面のような顔のまま、黙つて犬を見つめていたが、なぜか深いため息をついた。そうして、言った。

「店主どの。首輪と口輪は両方必要なのか」

「協定破りをした上、うちの客に危害を加えましたからね。しばらくはこの姿でいてもらいましょう」

犬が抗議めいたまなざしで店主を仰いだが、店主の浮かべる笑みを見て、うずくまった。おばばがその様に、またもや笑い出す。

「あの、紅さん？ このワンちゃん、どうしたんですか？」

ティラミスが尋ねると、「ちょっと、預かる事になりました」という返事がかえってきた。

「ですが、飲食店ですからね。そうそう店の中には入れられないんですよ。どこかにつないでおきましょうか」

「ひーひひひっ！」

おばばはもはや、息も絶え絶えだ。犬は恨めしげにおばばを見つ

めた。

「大きいワンちゃんですねえ……どうして口輪なんですか？」

「ちよっと、悪さをしましたので。反省させるために」

噛み癖があるのかなあ、とティラミスは思った。

「なでても大丈夫ですか？」

それでも口輪があるのなら、噛まれたりしないだろう。そう思いつつティラミスが尋ねると、店主は思案するような顔になった。

「ティラミスさん、犬がお好きなんですか？」

「大好きです！ ちっちゃいのが好きなんですけど、大きいワンちゃんも可愛いから好き。この子は……何だか神経質そうなんですけど」

妙にびくついている犬に、ティラミスは目をやった。

「なでたら安心するんじゃないかなって。だめですか？」

わくわくした風に言うティラミスに、店主は優しい笑みを浮かべた。

「どうぞ」

きゃー、と喜んだティラミスは、黒い犬の頭に手をやった。のけぞって後退ろうとする犬を、わしわし、と撫で回す。

「いやー、カワイー。悪さしそうな目つきだけど、こら、逃げないの。ワンちゃん、お利口さんでしょう？」

お座り！ お座りしなさい。ちゃーんとできたら、おやつあげますよ」

「ぐはははは！」

ぱったり、とテーブルに身を伏せて、おばばは笑い続けている。ウィルフレッドは、気の毒そうな顔をして犬を見た。

「ほら、お座り。あ、できたのねー。かしこいねー、ワンちゃん」
「ぎやはははは！」

おばばはもはや、笑い過ぎで体を痙攣させている。ウィルフレッドが咳払いをすると、ティラミスに言った。

「手を放してやってはどうか」

「え？ どうして？ このワンちゃん、賢いじゃない。ちょっと怖

「がりな感じだけど」

「その、なんだ。衆目を集めているのもあるし。さすがに少々、気の毒だ」

言われてティラミスは周囲を見回した。何だか注目を浴びているようだ。どうしてだろう？

「あら、本当に目立ってる……？ でも、かしこいワンちゃんをかしこいねーってほめてあげるのは、大事なことじゃない？」

「ひ、ひひひひっ！」

「そうですね。かしこいワンちゃんを、ほめてあげるのは大事ですよ。躰けとして」

店主がにこやかに言い、犬がびくりとした。

やだちょっとカワイイ。ゝワンちゃんと炭酸。 2

「お座りの他にお手もできるんですよ、このワンちゃん」

「え、かしこい。ホントにお利口さん！」

「向こうの舞台に連れて行って、みなさんに披露しましょうか。お手とお座りのできるかしこい所を」

「あつ、ひよつとしてそれも、隠し芸になるんですか？」

なぜか、犬は硬直していた。表情を強張らせ、全身の毛を逆立て、尻尾と耳をぴんと立てている。

人間で言うなら、ざーっと青ざめて顔色を悪くしているような感じである。

「何だか楽しそう！」

「いや、」

阻止しようと言うかのように、ウィルフレッドが口をはさみかけたが、おばがぐふぐふ笑いながら顔をあげ、「そりゃ良い考えじゃ」と言ったので言葉を止めた。

「躑躅は大切じゃしな。芸をするそれをみれば、みなも喜ぶであろうよ。バグバイプの演奏が終わったら、やればよかる」

おばの言葉に、犬は、それはそれは衝撃を受けたような顔をし、

すぐるような眼差しで店主を、ティラミスを、そしてウィルフレッドを見つめ、

どうにもならぬと悟ったのだろうか。尻尾をだらりとさせ、耳をぺたりと伏せて、うなだれた。いわゆるorzの姿勢である。やっているのは、犬だが。

涙がはらはらと、目から落ちていた。

「あら？　ワンちゃん泣いてる……どうしたの？」

前にいたティラミスが、まずそれに気がついた。店主はちら、とそれを見てから、持っていたピッチャーをテーブルに置いた。

「名前はルーザードですよ」

「あの変質者と同じ？」

ティラミスはちよつと顔をしかめた。

犬はふるふる震えながら、orzの姿勢を保っている。

「ええ、まあ。どうします？　同じ名前だと、可愛がる気もなくなりますか？」

「え、どうして？　変質者は変質者。ワンちゃんには関係ないじゃない」

ティラミスは答えた。おばが、ふふ、と笑った。

「関係ないかの？」

「関係ないですよ。あたしにとって、ワンちゃんは可愛いワンちゃん」

ふふふ、とおばばが笑った。

「でも可哀相ね、あんな変質者と同じ名前つけられたなんて。ルーちゃん？」

「ルーちゃん……」

ばたつ、とおばばがまたテーブルに身を伏せた。ぐふぐふ笑っている。

ウィルフレッドはひたすら、犬から目を逸らしている。

「一緒に舞台に出ますか？」

「ううん。やめておく」

店主の言葉に、ティラミスはしかし首を振った。犬が顔を上げる。ティラミスはそっ、と頭をなでてやった。

「この子ちょっとびくびくしてるし……人前に出すの可哀相みたい。静かな所で休ませた方が良くないんじゃない？」

「披露しなくても良いのですか？ それをやるなら、歌に出なくても良いですよ」

「あれ、そういう話だったの？ んん、でも良いや。」

ほら、ルーちゃん。怖がらなくて大丈夫。お利口ね……ちょっと人が多くて、怖いよね。

紅さんがすぐ、静かなところでおねんねできるようにしてくれるからね？」

おばばがまたもや、げらげら笑いだした。

犬は、なぜかティラミスから目を逸らした。

「あなたがそう言うのなら、まあ。それで良いですけどね」

店主が言い、グラスにピッチャーの中身を注いだ。泡が立っている。

「あ、さっきの炭酸水？」

ティラミスは首をかしげた。さっきより、泡のたちが悪い。

「気が抜けちゃった？」

「そうですねー……」

「炭酸水？」

おばははグラスに注がれた液体を眺め、眉をしかめた。

「紅どの。なんじゃ、これは」

「重曹とレモン汁を水に入れました。簡単なスポーツドリンクみたいなものです」

「なんだってそんなものを」

おばはが言いかけ、ティラミスを見て口をつぐんだ。

「スポーツドリンクじゃな」

「ええ」

ウィルフレッドがうさん臭そうな顔で、グラスを眺めている。

「飲めるのか、これ？」

「ほとんどが水です」

そう言うと、店主は自ら飲んで見せた。

「ふむ」

おばばがつぶやき、自分もグラスに注いで飲んでみる。

「お？」

目を丸くしてから、呆れたような顔になった。

「紅どの。貴重なしずくをこんな風に使うとは……」

「そのつもりはなかったのですが、……役には立ちました」

そう言つと、店主は犬をちらりと見た。おばばは、ああ、という顔をした。

「サー。こりゃ、貴重な飲み物じゃ。飲んでおけ」

そう言つて、ウィルフレッドにすすめる。男は不審げな顔をしていたが、グラスに注いで一気におつた。その顔が、驚きに彩られる。

やだちょっとカワイイ。ゝワンちゃんと炭酸。 3

「これは……」

「日のしずくじゃ。集めたのじゃろ」

おばばが言い、ティラミスに目をやった。

「そんなものかけられたら、そりゃ、暗い力を借りているものは近寄りはせんわなあ……」

「ティラミスさんもどうです？」

店主にすすめられ、ティラミスはスポーツドリンクを手を取った。
グラスに注ぎ、飲んでみる。

「あら？　へえ……なんだが、力が出るみたい、な？」

飲むと、なぜか、体の中から熱と力がふつつ、と沸きだした気がした。

その熱はすぐに過ぎたが、ぼつ、と温かくなった熱は、消えずに体を支えている。そんな気がした。

「重曹って、お掃除に使うぐらいしか知らなかった」

「掃除に使う重曹は、食べられないものですが。重曹には、食べら

れるグレードのものもあります。

それを使って料理をしたり。こんな風にスポーツドリンクを作ったりできるんですよ」

「そうなんだー……」

うなずいたティラミスだったが、ふと犬を見ると、なぜか犬は震えていた。

「あら？ ルーちゃん？」

不思議に思つて犬をのぞきこむと、飛び上がって驚かれた。なぜか必死な様子で、ティラミスから逃れようとする。

「ルーちゃん、どうしたの？」

毛を逆立て、足を踏ん張って体を離そうとする犬に、ティラミスは手を伸ばした。その手をつかまれる。

「やめておけ」

ウィルフレッドが言った。

「どうして？」

「見てわからないか。あれは、恐怖を覚えている」

「恐怖？ ルーちゃん……」

困惑したティラミスがもう一度、犬の方を見ると、店主が綱を引いて犬を立たせていた。

「少しばかり、刺激が強過ぎたようです。静かな所に連れて行きま
すね」

「え、あ、そうなの？ なにか怖いことあったの？」

「この子には、この世の中で、怖いものがたくさんあるのですよ。
大丈夫。静かなところで寝かせておけば、落ち着きます」

店主が苦笑気味に言い、犬に目をやった。

「彼女は選んだ。わたしたちは躡けをして見せるつもりだったが。
しかし彼女の選択がこの場合、優先される。恩義を受けたこと、
忘れるな、ルーザード」

店主の言葉に、犬がうなり声を上げた。けれどすぐに、店主とテ
ィラミスから顔を逸らす。

「連れて行きますね」

そう言つと、店主はルーザードを連れてその場を去つた。
その後ろ姿を見ながらティラミスは、

「紅さんも、犬が好きなのねえ……」

と、つぶやいた。

ウィルフレッドが何とも言えない顔をし、おばばがまた笑い出した。

そこでタイミングをはかったように、バグパイプの音が、ぷおー、ぷおー、と響く。演奏が始まったのだ。のんびりした音楽が店の中に流れる。

「笑いすぎて腹が減つた」

そう言つと、おばばは猛然とした勢いで食べ始めた。

ナンに肉や野菜をはさんでばくつき、運ばれてきたスープをすする。美味じゃ、とか何とか言いながら、次々と平らげてゆく。

「この音楽の次に、おまえの歌があるのだな」

その食べっぷりに思わず見入っていると、ウィルフレッドがそう言つた。

「そうだった……あたし、ちゃんとできるかな？」

言われて思い出し、ティラミスはあたふたとし始めた。

一夜の魔法が過ぎてゆく。

* * *

歌は、思いのほかうまく行った。

ティラミスは焦りながら舞台上上がったが、同じように舞台上上がる人たちを見て、ちよつと安心した。一人で目立つわけではないらしい。

やがて始まった歌は、聞いたことのないものだったが、にぎやかで、テンポが良かった。ティラミスは周囲の者に合わせ、手拍子を入れ、繰り返しの部分で声をそろえてコーラスを入れた。

聞いている者たちも喜んで手拍子を入れている。歌が終わった時には、盛大な拍手をもらった。

「終わった〜」

ほっとしながらウィルフレッドの所に戻ると、おばばが拍手をしてくれた。

「良い出来であつたぞ」

「ありがと。緊張したわー」

差し出された飲み物は、先ほどのスポーツドリンクだった。

「これ、割と美味しい……作り方教えてもらおうかなあ」

「この場で飲むから美味しいのかもしれないぞ。にぎやかに、みんな騒いでおるからのう」

「ああ、そうかも」

ティラミスはちょっと笑った。

「影も何もない。正常じゃな」

おばがちらり、とティラミスを見てつぶやく。ウィルフレッドが目をやると、軽くうなずいた。

「外側も内側も、正常化しておる。紅どのには、念の入ったことじや」

なんの話だろう、と思った時、どよめき上がり、ティラミスの注意は逸れた。見ると、舞台の上で手品が始まっている。

「わ、すごい！ どうなってるの、あれ？」

「ほう。見事だな」

ウィルフレッドも感心したように言う。舞台上のマジシャンは、袖口から虹を生み出し、星をきらめかせ、花と緑を舞台に生み出し、幻想的なショーを展開していた。

それを見て、笑い、あるいは手を叩いている、様々なコスプレをする外国人。

楽しいなあ、とティラミスは思った。

ここって、変わってる。でも、何だか素敵。

みんな一人一人が少しずつ変で、

でも、筋が通っていて、…… かつこいい。

そう思っていると、なんだか眠くなってきた。頭がふわふわする。

「あれえ？ そんなにアルコールは飲んでないはずなの、に？」

しばらくがんばっていたが、どうにも眠くて、ティラミスは座っていた椅子にもたれかかった。うとうとする。
すると、と周囲の様子が変わった気がした。

羽のある人や、角のある人。中世ヨーロッパ風の衣装の人々。彼らの姿が、現実味のないものとなり。

横にいるはずのウィルフレッドもまた、幻めいたものとなる。

笑い声とおしゃべりの声が、音楽のように聞こえ、

店の中で、噴水のように噴き出す光。

あれは、なに。

「今宵集まった方々には、様々なものをいただきました。感謝いたします」

店主の声が遠く聞こえる。

「次の集まりは、秋分の時に。お土産をどうぞ。太陽のしずくを入れて練った、白樺の樹液のドロップです」

おお、とか、ああ、とかいう声が入。

「良い集いであつた」

「楽しかったぞ」

そんな声がして、風が吹き。翼を広げた人々が、店の中を舞い上がり、天窓から出て行った。

「素敵な集い」

「次もまた寄せていただくわ」

そう言った、美しい歌声を披露した女性たちは、きらきらと輝きながら店の中央で噴き上がっている光に飛び込み、消えた。

「秋分の時に」

「次の秋分の時に」

そんな声が、合い言葉のように響き合う。風と光が、店中を駆けめぐる。

ふと、何かが近づいてきたのを、ティラミスは感じた。黒く、大きな何かの影。

（ルーちゃん？）

先ほどの犬を思い出す。あれぐらいの大きさの犬を、わしゃわしゃ丸洗いしてみたいなあ、とも思う。なで回すのは、楽しいだろう。そう思っていると、低い声がした。

「腹は立つが……恩義は恩義だ。俺の名を覚えておけ。ルーザードだ」

（ルーちゃん、しゃべれたの？）

そんな風に思う。

「一度だけ、力を貸してやる。何かあれば呼べ」

（犬なのに、偉そうなのね……ああ、丸洗いしたいなあ）

洗ってブラッシングしてあげれば、きつともっと、可愛くなる。
そう思っていると、「やめてくれ」と、どこか沈痛な響きの声
がした。

おばばがまた笑いだしている。おばばさまったら、笑い上戸なん
だなあ、とティラミスは思った。

力と熱。光。

手と手を取り合う、不思議の滑^{うす}。
歌と魔法に満ちる店の中。

うつうつとしながらティラミスは、それを感じていた。目覚めれば、
自分はこれを、忘れてしまうのだろっかなと思いつつながら。

そして、新しい朝。 1

* * *

「おい。そろそろ起きろ」

そんな声がして、ティラミスは目を覚ました。

「ん？ うつつ？」

ぼんやりしながら顔を上げる。

店の中は、静かだった。あれほどいた客が、誰もいない。

「うえ？ あれ？」

ぱちぱちとまばたき、周囲を見回す。
がらんとした店内。

テーブルには、食べ残しの乗った皿や、汚れたカップやグラスが残されている。

店主とじんが、それらの皿を回収している。そのまま、店の清掃に取りかかるようだ。

「あ、れ〜?」

「よく眠っておったからのう。起こさなかったのじゃが。もうそろそろ、わしらも帰るのでな」

おばばが、そう言ってティラミスの前に立った。

「そろそろ夜明けが来るしのう」

「えっ、そんな時間なの!?!」

慌てふためいてティラミスは、立ち上がった。バッグをひっかきまわし、携帯を取り出す。

時刻を確認すると、朝の四時半。

「いや〜〜! 外泊しちゃった〜〜!?!」

絶叫する。やってしまった。家族になんの連絡もなく、無断外泊。あわあわと慌てていると、店主がやって来た。

「何度が鳴っていましたよ、携帯。でもティラミスさんは、ぐっすりお休みでしたので……」
「きゃ〜〜〜っ!」

かけてきたのは両親だろう。

慌てて確認すると、着信履歴がすごい事になっていた。メールもまだ起きているだろうかと焦りつつ、電話を入れると、数回コールをした後に、すぐに出た。

『無断外泊とは、良い度胸だね、不良娘』

怒っているらしい母親の声に、ティラミスは青ざめた。

「ひゃわわ、お、お母さん、これには事情が！ 深い事情が！」

『なにが深い事情よ。酔いつぶれて眠っちゃったらしいじゃないの！』

「えうわ？ なぜそれをつ！」

「あ、わたしが電話に出ましたので」

焦って叫ぶと、店主が片手を上げてそう言った。

「え、紅さん？」

「すみません。何回目かに鳴っていた時に、緊急の連絡でもあるのかと……勝手にして、悪いとは思いましたが」

『紅さんには、お礼言つのよ、ちゃんと！ 事情を説明してくれたのは、紅さんなんだからね！』

ほんと心配したんだから、何か事故に巻き込まれたんじゃないかって……お店で酔っぱらって寝てたなんて、思わないじゃない、ほ

んともうー!』

母親が言うのに、ティラミスはうなだれた。

「あつう……ごめんなさい、お母さん……」

『話を聞いて恥ずかしかったわよ。今度から、遅くなる時は連絡を入れてちょうだい』

「うん。すっかりしてたの。もっと早くに帰るつもりだったから……」

しょぼーんとしつつ、ティラミスは母親に言った。

『この後はどうするの？ 電車ないでしょ』

「あ、そうだよ。始発は六時じゃなかったっけ……えと、一度戻るつもりだけど。着替えたいし」

『じゃ、お風呂沸かしておくから。早く帰ってらっしゃい』

「うん。ごめんね。ありがとう」

電話越しに母親に頭を下げると、『もう良いわよ、無事だったんだから』と返事があった。

電話を切つて息をつくとき、ウィルフレッドがこちらを見ていた。

「母上どのか」

「うん。心配かけちゃった……ん？」

なぜか彼の顎には、湿布がしてあった。怪我でもしたのだろうか。しかしウィルフレッドはそれについては何も言わず、「そうか」と言った。

「母上どのには、案じられていたのだな。悪かった。連絡した上で来たのかと思っていたのだ。起こすべきだったな」

済まなそうに言われ、ティラミスは慌てて首を振った。

「あ、いや、サー・ウィルにはほんと、いろいろしてもらったし……あの。よくわからない風習の人の中で、でもどうにか過ごせたしあのね。これは、あたしが悪かったのよ。遅くなるってわかった時に、連絡入れば良かったのに、しなかったから……」

結局、寝ちゃって。でもこれも、あたしの責任だから。サーが気にしないでも良いの」

「だが」

「だから、気にしないでっば。いつも上から目線のくせして、過保護すぎるわよ、変に」

そう言つと、「上から目線？」と言って首をかしげた。意味がわからなかったらしい。

「なんか偉そうってこと」

「そうか？」

「そうよ。偉そうにされたら腹が立つ人ってのもいるのよ。もうちょつと、親しみやすくなりなさいよ」

ちよつと八つ当たりつばいなあと感じつつ言つと、「そうか」と真面目に返されて、逆に慌てた。

「え、いやだから、そうじゃなくて……ああー、えつと、もう！」

つかつかと歩み寄り、ティラミスは、たたんで置いてあつたウィルフレッドのマントを取り上げた。

「おい、それは俺のだぞ」

「わかつてるわよ！ これ、借りてくわよ」

ウィルフレッドは啞然とした。

「待て。どうするのだ、それを」
「洗うの！」

ウィルフレッドは再び、啞然とした。

「あらう?。」

「汚れすぎよ、これ。ついでに繕つくろつといてあげるから」

「なぜ」

「なぜって、貸してくれたでしょう」

「貸したが……なぜ」

「だから、」

ティラミスは真っ赤になると、怒鳴った。

「ありがとって言いたいから、洗ってやるって言ってるの！
黙
ってさせておいてよ、男なら！」

理不尽だ。

ウィルフレッドはそんな顔をした。

「一つ、……尋ねたいのだが」

「なによ」

ティラミスが言うと、ウィルフレッドは真面目な顔で尋ねた。

「今のおまえの発言は、……『上から目線』とやらの実践か？」

聞いていた店主とじん、おばばが爆笑した。

「夏至じゃ！ 夏至じゃのう」

「いや、おばばさま、それ意味わかりませんから」

「青春だ……ぐふっ」

三人で笑い続けている。ティラミスはきーっとなって怒った。

「ちょっと！ なに笑ってるの……！ おばばさま、なんで夏至なのよ！ 紅さんも、やめてよ！ じんさんまで、どうしてそんなに笑うのようっ！」

「リアルツンデレ、ごちです」

笑いながらじんが言い、ウィルフレッドがさらに不可解だという顔になった。

「つんでれ？」

「サー・ウィルフレッド！ あんたはもう、何にも尋ねないで……！」

ティラミスが絶叫した。

そして、新しい朝。 2

* * *

始発が動き出すまで、ティラミスは店でもうひと眠りした。
店主に起こされた時にはもう、ウィルフレッドもおばもおらず、
じんもいなくなっていた。

（あれ？）

明るくなってきた夜明けの光の中、いつも通りの『ただの茶屋』
の店の中。

（あれ？）

ティラミスは首をかしげた。店が……小さくなっていないか？
壁を見る。テーブルを見る。天井を見る。
いつも通りだ。
いつも通りの『ただの茶屋』だ。

なぜ？

「どうしました？」

きよろきよろと、あちこちを見回すティラミスに、店主が声をかけた。

「あの、紅さん。昨夜なんですが、……天井に窓があったりしませんでした？」

「そうだったかもしれませんね」

「えと、それに、……テーブルの数ももっと、多かった、ようなの？」

「そうだったかもしれませんね」

「か、壁も、もっと向こう側にあった……気がするんですが」

「まあ、……そうだったかもしれませんね」

店主はそう言うてから、にっこりして付け加えた。

「夏至でしたから」

それ、なんの説明にもなっただけなんですけど！ とティラミスは思った。

しかし、くるる、と鳴り出したお腹に、朝食代わりにと、店主にスープやサンドイッチを差し出され、それ以上追求することができなくなった……お腹がすいていたのだ。

昨夜、あれだけ食べたのに。

「健康な体が恨めしい……」

はぐはぐとサンドイッチを食べながらティラミスが言つと、

「健康なのが一番じゃないですか」

と、店主に苦笑された。

食べながら、自分の横を見る。ウィルフレッドのマントがそこに置いてあった。ちゃんと洗って、繕って返さないと、とティラミスは思った。

家族に間違つて捨てられないよう、「大事なものだ」と言つておかないと。

そこでスープがはねて、スーツの胸元にしみを作った。ティラミスは慌てて、ハンカチを探した。バッグを開けると、招待状が目に入った。

何気なく取り出して、文面を見る。カードには、

『夏至の祝いにおいでいただき、ありがとうございました。みなさまに、光と祝福がありますように。』
『ただの茶屋』店主 紅

と、書かれていた。

「……あれ？」

こんな文面だったか？ このカード。

「あれ？ あれえ？」

なんだか記憶が混乱してきて、首をひねっていると、スープのしみに気づいた店主が、おしぼりを持ってきてくれた。そこで、店主に「お茶をいれましょうか」と言われる。

考えるのが面倒になって、「お願いします」と頼んだ。

やがて出されたのは、ケニアのミルクティー。ほんのり甘くてキヤラメルのような香りのする、紅茶だった。

「ああ、もう、何でも良いや」

「なにがです？」

「うん、美味しいから。お茶が。もう何でも良い……幸せすぎる」

うつうつ、とうなってお茶を飲み、ティラミスは朝食を平らげた。そうとも。

体重計が、なんだ！

* * *

大急ぎで店を出るティラミスを見送り、店主はうん、と伸びをした。

「やれやれ。夜が終わった」

あくびをしながらそう言うと、じょうろに水を汲んで、植木鉢に水をやり、

それが終わると店にもどり、扉を閉めた。

店の中に、光を放つ、何かのかけらが落ちている。

「一夜の魔法の名残ですね……」

拾い上げて、店主は微笑んだ。

それは、小さなしずく。

中に歌声が閉じ込められた、魔法の力の結晶。

光をなくしたランタンが、床やテーブルにまだ置いてある。その内の一つにはまだ、ぼうつと光がともっていた。

そのランタンに向けてかけらをかざすと、光が強く、明るくなった。

しゅんつ。

小さな音を立て、飛び出して来たランタンの光は、店主の持つか

けらにぶつかると、より強い輝きになって弾けた。

歌声が響く。

店中に歌声と、光のかけらが飛び散った。それらは大気に溶け、広がり、さらに広がり、壁に、天井に、柱に、窓に、店の内外に置いてある植物の鉢植えに降り注ぐ。

緑が鮮やかになり、花がより美しく生き生きとした。

木造の建物の梁や柱が、古びてはいるものの、しっかりとした存在感をかもしだすものとなる。

壁やテーブル、椅子の色が、明るさを増した。

そして、^{かまど}竈が。

厨房にある竈が、きらきらと輝いて力強さを増し、どっしりと安定した姿になる。この竈で作るケーキやクッキーは、さぞかし美味しいものになるだろうという風に。

そうして光は店中を走り、輝き、

やがて消えた。歌声と共に。

店は、改装したばかりであるかのような、力強さをまとうて静まり返った。古びてはいるのだが、ていねいに扱われて時を重ねた、品の良さとぬくもり、そして優しさが、しっかりとした存在感と共にそこにある。

店主はふう、と息をついた。

「夏至の集いは終わり。さて。

また、太陽や月のしずくを集めないと。次に集まったお客さまたち、渡せるだけ……。

ああ、でも、今日はもう、寝よう。さすがに疲れた」

そうつぶやくと、店主は、『本日休業』の札を扉にかけた。

*
*
*

一夜の魔法は消えました。魔法小路の『ただの茶屋』。
本日は、お休みしております。

どうかみなさまに小さな魔法が届き、その輝きが内側から、みな
さまを支え、温めますよう。

『夏至の夜の不思議な時間』 F i n .

そして、新しい朝。 2（後書き）

2011年、夏至記念作品でした。

この話を書いた時にはまだ、本編に、おばさまも、ウィルフレッドも出ていませんでしたが、

本編に登場するのは決定済だったので、フライング気味に出てもらいました。

次の章は、この時のウィルフレッド視点です。

1・(前書き)

夏至の夜の不思議な時間、ウィルフレッド視点です。

魔法小路では、予期せぬ出来事が起きる。

小路は常に、大きさを変える。場所すらも、一定ではない。一度出会った店に、二度目も出会えるとは限らない。そうして、今までが無事であつたからと言って、次も無事でいられるとは限らない。

ここは魔術や呪術のたぐいの法則が、人の世のそれよりも優先されるのだ。

何も知らぬ者が迷い込めば、ただではすまない罠が、あちこちに張られている。

幸運をつかむ者もいれば、不運に落とされる者もいる。そのすべてがどのような基準なのか、どのような法則によるのか……人の世にある者に、知る術はない。

決めるのは、小路の住人であるからだ。

来訪者は、己の出会った小路の住人の意に沿うよう、怒りを買わぬよう、慎重にふるまう他はない。

わたし、ウィルフレッド・ホークは、フォレシアの国、ミストレイクの騎士である。

ミストレイク候であるロード・アラン・ミストレイクに仕えてから何年もたつが、この地方はおおむね、平和である。候は善政を敷き、奥方であるレディ・アリシアともども民に慕われている。

しかし、候には唯一の欠点……と言うか、困った点があった。魔術のたぐいに、並々ならぬ関心を抱かれるのである。

そんなミストレイク候が魔法小路のうわさを聞いて、黙っているわけがない。わたしは候の『お願い』という名の命令により、魔法小路を探しまわり、どうにかしてその中に入り込まねばならない事態に陥った。

正直に言おう。

魔法小路の話は、眉唾ものだと思っていた。魔女や魔法使いが集う場所だと言うことは、うわさをあちこちで聞き込むことでわかった。

何やら怪しげな呪いをする男や女たちが、祭りなどで村や町をうろつくのは見かけたことがある。

おそらく、小路に集まるのもそうしたやからだろう。わたしはそう思っていた。妙な格好をして怪しげな言葉をはきちらし、しかし実際には子どもを脅かすのが精々の、何という事もない者たちが、集まっているだけなのだろうと。

その考えをひっくり返されるのに、さほど時間はかからなかったが。

わたしが初めて魔法小路に踏み込んだのは、さほど前の事ではない。

それまで何度も、慎重に探し、しかし入り口を見つけることができなかったその小路に、なぜ入ることができたのか。今でもわからない。

顔なじみになった店主からは、『そういう時だったのだろう』と言われたが、意味がわからない。だいたい、魔女や魔法使いが集まる魔法小路にありながら、魔法のまの字もない、何の変哲もないお茶と菓子を出すだけの店など、ふざけていないか？

ともかく、魔法小路である。やつの事で入り込んだそこで、わたしは自分の入れそうな店を探した。

怪しげな呪文のかかった道具や、薬。古文書。そういったものが見られると期待していたわたしの前に現れたのは、

ただの茶屋だった。

仕方がないのでスコーンと茶をもらい、相應しいと思われる代金を支払った。

魔法小路について何か情報を持っていないかと、店主にあれこれと尋ねたが、要領を得ない返事ばかり。あきらめて、出された菓子と茶を食したところ、

美味だった。

言葉をなくし、ひたすら食べてしまうぐらい美味だった。

ただのスコーンのはずなのに。ただの茶のはずなのに。なぜこんなにうまいのだ！　と思わず脳裏で叫んだ。顔にはおそらく、出ていなかっただろうが。

ある意味、店主の出す菓子と茶は、魔法である。

それからわたしはしばらく、店主と話をしてように思う。やがて、そろそろ店を出るよう、店主に言われ、その店を辞した。

しばらく歩くと、見慣れたミストレイク領の町並みに出くわした。

振り返ると、……小路は消えていた。狐につままれたような心地だった。

それからわたしはミストレイク候に、魔法小路に入れたこと、そこで茶屋に出会い、茶と菓子を食べたことを報告したが、

候からはなぜか、生ぬるい眼差しを注がれた……なぜだ。あの茶と菓子のうまさを褒めちぎってしまったからか。

それから何度か、わたしは魔法小路に足を踏み入れたが、

怪しげな武器や道具には、とんと出くわさず。ひたすらあの、ただの茶屋に通い、うまい茶と菓子を食べる日々が続いた。素晴らしき日々だった。さわやかなチェリータルト。軽やかなクリームの乗ったパイ。塩をきかせたキャラメル……いや。

候への報告は続けていたが、なぜか土産を頼まれるようになった。奥方と喧嘩をした時、機嫌を取るのにパイを贈ったところ、好評だったらしい。

その後、その店で様々な客と出会うようになった。

いずれも店内で食事をしている時には、何やらしまりのない、平和そのものという顔をして食べている。……わたしもあんな顔を食べて食べているのだろうか。

中には、かなり凶悪な魔法使いもいるらしいのだが。いずれも店内で茶を飲み、菓子を食べている間、力を振るうことなく、武器を手にすることもなく、

ひとときの、平和な時間をそこで過ごしている。

その店に出入りするようになってから、それなりに、魔法を扱う者の知り合いが増えた。

増やしたくはなかったのだが、そうだった。

そうして知った事は、魔法小路は、この世に半分だけしか属していない場所である、という事である。

詳しいことはわからない。わたしはあくまでも騎士であり、学者ではないのだ。

ただ、店主や、魔法を扱う者たちが言うには、魔法小路は半分だけ、この世に存在し、

残る半分は、さまざまな世界につながっているのだと言う。

さまざまな世界？ 世界は一つではないか。そうではないのか？

首をひねったが、そういうものだと言われてしまった。良くわからん。

とにかく、魔法小路では常識が通用しない。それだけは確かである。

そうして、さまざまな世界とやらから、さまざまな客もやって来

る。中には人間ではないものもいるらしい。与太話だろうと思ってい
たら、本当に人間ではないものと出くわしてしまった。

羽や角や尻尾のある者が、ごく普通に歩いていた。驚いた。

人間ではあるが、常識が全く通用しない者もいる。

ティラミスとかいう娘と知り合った時には、足を丸出しにしたは
したない姿に驚き、騎士を敬わない態度にまた驚いた。

どう見ても十三、四。その若さで働いているらしい。おそらく、
親御を楽にさせるため、日中は奉公に出、夜に帰るという暮らしな
のだろう。

それは感心なことだが、年上の人間、それも騎士に対し、礼儀が
なっていないのはどうなのだ。

そう思っていたら店主に、ティラミスの世界では王や領主、騎士
がおらず、魔法も表向きは存在しない事になっているのだ、と説明
された。なんだそれは。どんな無法な世界だ。

魔法も騎士も知らずに育っているの、ちょっとした礼儀や、目
に見えないものへの注意もできないらしい。わたしでさえ、出入り
口での妖精への挨拶、何かあった時の為の決まり文句を知っている
と言っのに。

妹のローズは十四歳になったばかりだ。同じぐらいの年ごろとい
うこともあり、この魔法小路ではあまりにも無力であるらしいティ

ラミスを、わたしは気にかけるようになった。

* * *

夏至の夜に、茶屋で集まりがあると聞いた時には、参加するつもりはなかった。

しかしミストレイク候に期待の眼差しを注がれ、奥方と妹のローズに『是非行くべき！』と叫ばれた。

特に奥方とローズが熱心だった。ティラミスと会うのか、何か贈り物をすれば、とか、やたら言われた。会ったらどうだと言うのだ。母上に至っては、指輪がどうか言っていた。なぜ指輪？

そうして夏至の夜。いつも通りにやって来たはずの茶屋は、明らかに大きくなり、立派になっていた……なぜだ。

疑問を抱いたが、ここは魔法小路なのだと自分を納得させ、店主に挨拶をすると、入場料として短剣を取られた。新調したばかりだったのに。

中に入ると、ティラミスが、相変わらず足を出したはしたない姿で座っていた。ご機嫌だった。手にしたグラスを見て、どれくらい飲んだのだと思った。

同時に、今夜はいつもより、多くの者が集うことを思い出した。

中には危険なものもいるだろう。そんな者たちの前で、こんな無防備な娘を一人、放り出すのはどうであろうか。

わたしは自分のマントを外し、ティラミスの下半身を取りあえず隠した。ティラミスは、何やら文句を言っていたが、やって来た店主に説得され、長いスカートをはく事に同意した。

……と、思っていたら、さっそく怪しげな魔術師につかまっていた。

その男を見れば、ルーザードである。おばから聞いたことがある。闇の力を借りて騒乱を起こす、かなりたちの悪い魔術師だ。

下手をすれば傀儡くぐつにされ、あるいは魔術の素材にされかねない。なのにティラミスは、のんきに会話をしていたようだ。危うすぎる。

彼女を背にかばい、睨みをきかすと、魔術師は退散していった。

今夜、この店では騒ぎを起こさないとの協定が結ばれている。人目もある。そのゆえだろう。

そうでなければ、どんな危害を加えられたかわからない。相手は魔術師だ。

だと言うのにティラミスは、何やら文句を言っている。危険を危険と知らないと言うのは、なかなか面倒なものだ。説明しようにも、彼女の常識はわたしのそれとは違いすぎている。どう説明すれば良いのかわからない。

結果、黙殺する事になった。それでティラミスは、また腹を立てたようだ……。

その後は、しばらく食事に専念した。文句を言っていたティラミ
スも、食事には文句はなかったらしい。結構な食欲を見せていた。

店主から頼まれたこともあり、わたしはなるべく、ティラミスの側にいる事にした。見張っていなければ、何をしでかすかわからない。

ただ、ティラミスとの会話は、面白かった。着飾ることしか頭がない貴族の令嬢や、かしこまるばかりでこちらを恐れる村娘と比べると、彼女は鋭い頭脳を持っている。そう思う。

身分や魔法に関してあまりにも無頓着で、見ているとはらはらするが。

魔女のおばばや、パン職人のじんと会話をしていると、おばばが怪しげな菓子をよこした。あまりに怪しかったので口にするのをためらっていると、無理やり飲み込まされた。味？ そんなものわかるか。

口直しにと酒を差し出されたが、わたしは酒は、あまり飲まない。同僚によくからかわれるが、酒よりも茶や、この店で出されたスムージーとやらの方が好きなのだ。それを知っていながら酒を差し出すおばばに、どこまで人をからかうつもりかと睨み付けた。

すると、ティラミスが『水を持ってくる』と言って駆けだした。思いも寄らない行動だった。いや、……この娘は、心が優しい。それは知っている。妙なものを食べさせられた人間を目にしたら、水を飲ませようと思えるのは、この娘にとってある意味、当然のことなのだろう。

しかし、今夜、ここでは。一人になるのは危な過ぎる。

後を追おうとしたわたしだったが、そこに店主が来た。事情を聞いて、店主はわたしにグラスに入った水を寄越すと、すぐに厨房に向かった。

しばらくして戻ってきたティラミスは、なぜか濡れていた。おばが眉を上げ、何やらつぶやく。

ティラミスの全身から、何かの力を感じたらしい。

しかしティラミスは、案の定というか、何と言うか。何が起きたのかわかっていなかった。彼女の話によると、婦女子を狙う不埒なふらちやからがいて、店主が来たので慌てて逃げていったらしい。

おばが眉をしかめたので、こっそりと、何か魔法に関したことかと尋ねると、たぶんそうじゃろ、と返事があった。

この娘は妙に運が強く、毎回、危険と出くわしては、無自覚に回避する。今回もそうらしい。

ルーザード、という名前を口にしたので、あの魔術師か、と思い当たった。一度は引き下がったものの、何やら仕掛けようとしたらしい。

協定違反じゃな、と小さくおばがつぶやいたので、どうにかできるのか、と尋ねようとした時。

店主が、

犬を連れてきた。

どう見ても、普通の犬ではなかった。わたしは騎士だ。魔法使いではない。魔法に関したことは、さっぱりわからない。

そのわたしでさえ、尋常ではない何かを感じた。

だと言つのに……、おい。なにをのんきに、可愛いワンちゃんなどと言っているのだ！ どう見ても怪しいだろう！

ティラミスは、明らかに怪しい、首輪をつけられ、口輪をつけられ、鎖をつけられて引きずられてきたその黒い犬に突進すると、頭や体をなでまわし始めた。

げらげら笑っていたおばばが、「ありや、ルーザードじゃ」と低く言う。協定に違反した罰として、あの姿にされたい。恐るべし、店主。

そう思っていると、ティラミスがさらに、犬をなでくりまわす。いや。腹はよせ。よしてやれ。それは犬だが。確かに犬の姿をしているが。

一応、成人した男なのだ！

しかし、何をどう説明すればと思っていると、店主がティラミスに、お手とお座りを皆に披露してはどうかと提案してきた。

犬の見せた絶望の表情には、さすがのわたしも気の毒になった。この場にいる者はみな、ティラミス以外は、その犬がルーザードである事に気づいている。

闇の魔術師ルーザード。

騒乱の魔術師ルーザード。

そう謳われた男が、あるうことが、犬の姿にされ。

若い娘になでくり回され、お手とお座りをさせられている。彼がルーザードであるを知っている人々の、目の前で。

……気の毒すぎる。いろいろと。

そう思っていると、ティラミスは、やめておく、と言った。なぜだろう。

この娘は、魔法を知らない。

魔法の関わる世界の法則を知らない。

しかし、本質を見抜く目を持っているのではないか。そう思える。犬にされたルーザードを人前で披露すれば、それは、彼にとっては相当な打撃になり、また汚点となるだろう。

それでもおばが、また店主が、それを勧めるのは。ルーザードが協定を破った、罰が必要であるからだ。そうして、その罰は、彼により被害を受けた者が与える必要がある。

だから、店主はティラミスを選んだ。

なのに、この娘はそれを拒む。

「あたしにとって、ワンちゃんは可愛いワンちゃん」

変質者は変質者で、この犬とは関係がないと言う。関係を切る、という一言は、ここではまた、別の魔法の法則となる。

「関係ないかの？」

ふふ、と笑っておばが確認を取った。おそらく、この言葉には何かある。

……と、思っていたら、ティラミスが犬に『ルーちゃん』という呼び名をつけた。おばがばったり倒れて笑いだす。どうにも魔術師ルーザードが気の毒になってしまい、わたしはひたすら、犬から目を逸らした。

後になってから、おばが説明してくれた。ルーザードが仕掛けた術が、あの一言で、すべて無効になったらしい。店主がティラミスに浄化の術を施していたらしいが、あの一言で、さらにそれが強

まった。

おそらく、今後ルーザードが何を仕掛けようとしても、あれの術はあの娘には届くまいよ、と言っておけばは笑った。さても、運の強さは折り紙付きの娘よのう、と言って。

『ルーちゃん』という呼び名にも、何やら魔法の法則が働いたようだ。良くわからないが、今後魔術師ルーザードは、彼女の前に出る時には、常に犬の姿になってしまうらしい。

……それは、彼女に近づかないようにするのではないか。さすがに。

* * *

気がつくと、ティラミスは寝ていた。うつらうつらして、頭がゆるらしているな、と思っていたら、本格的に眠ってしまったようだ。

テーブルに突っ伏して、すうすうと寝息をたてている。

やれやれ、と思っていたら、妙な音が響いた。聞いたこともない、きんきんとした音だ。何かの音楽のようでもある。

音は、意外と響いた。ざわめいていた店内が、一気に静かになる。

「おや……ケータイですね」

店主がやって来て、音の出所を探すようにした。ケータイ、とは、じんとの会話でも出てきたが。何かの道具か？

響いていた音は、止まった。店主が首をかしげ、ティラミスを見る。

「寝てしまいました？」

「ごらんの通りだ」

そう言つと、「たぶん、ティラミスさんのケータイだと思いますが……」と店主がつぶやいた。

また、音が響く。

「ティラミスさん？ ティラミスさん……」

店主が起こそうとしたが、むにやむにやと何か言いながら、幸せそうに寝ている。起きる気配はない。

「電子機器の音は、昔ながらの魔力とは相性が悪いんじゃないかなあ」

ランタンの光がゆらめいて点滅している。ケータイとやらの音に合わせて、ちかちかしている。

「でんし、きき？」

「からくりのようなものじゃ。その娘の世界では、それが魔法の代わりをしておるのよ」

おばばの言葉に、そうか、とうなずいた。良くわからないが、別

の世界の魔法らしい。

「困りましたね……」

またもやケータイとやらが鳴り出し、店内の灯がちかちかと瞬いた。集った者たちが、ざわついている。

「出してみればどうじゃ？」

「ですが……個人情報に関わりますし……」

個人の情報がどうしたのだ。

おばばと店主の会話は良くわからなかったが、何か魔法の法則に関わることらしいので、とりあえず、店主の動向を見守った。

音が途切れ、また鳴り出す。店主はためらっていたが、ついにテイルミスの持っていた小さな鞆に手を入れ、銀色に光る小さな道具を取り出した。

薄っぺらい金属で、色とりどりの小さな細工物がぶら下がっている。何に使うものか良くわからないが、精巧な細工物であることは確かだった。

あの妙な音は、それからしている。

「すみません、みなさん。少し静かにしてて下さい」

そう言うつと、店主は店の隅に移動した。その場にいる者がみな、静かになる。

「もしもし？」

店主はそれを、自分の耳にあてた。そうして、そこにいない者と会話をしているかのように、話しだす。

「いえ、わたしは……『ただの茶屋』という店の者で。紅と言います。

いえ、ティラミスさんは……寝ておられまして。うちの店で今夜、貸し切りのパーティーがありまして、ティラミスさんはそれに参加して……ええ」

何をしているのかと首をひねっていると、「ありや、遠くにいる人間と会話ができる道具じゃよ」とおばばが言った。

「それはすごい。あんなに小さな物なのに」

「そうじゃな。わしらも水鏡で会話はできるが、あれはあれで便利じゃ」

「この娘に魔力はないと思っていたが……魔法使いの類だったのか？」

そう言うと、おばが首を振った。

「あれは、魔力がなくとも動くのよ。そういうからくりになっておる」

わたしは、ほう、と驚きの声を漏らした。

「魔法使いでなくとも使える道具なのか」

「電気がなければ、ただの金属のカタマリじゃがな」

それから簡単な説明をされたが、良くわからなかった。何やら、この娘の世界では、雷の力を閉じ込める技術があり、それを使って色々な事を行っているらしい。

魔法使いでなくとも使える魔法の道具、という発想にはしかし、驚かされる。

「それで、店主どのは、誰と話しておられるのか」

「ああ……おそらく、この娘の家族じゃろ」

「家族？」

「この娘の世界では、あの道具は、多くの者が持ち歩くものなのじゃよ。若い娘が夜道を一人で歩くと、危ないじゃろ？」

じゃから、あれを持って歩く。何かあった時には、すぐ誰かに連

絡ができるようにな」

わたしは、目を見開いた。それは素晴らしい。

「なるほど。そのように考えて道具を作る世界なのか……確かに、
か弱い女性が生活するには、色々とむずかしい世の中であるからな」
「弱い者でも生きやすい、そういう世界を目指しているらしい。と
りあえずはな。悪さをするものは変わらずおるし、誰もが賢いわけ
でもないが」
「それでも、そういう世界があると言うのは……、なかなか胸を
熱くするぞ」

魔法や力が、強き者のためにあるのではなく。弱き者のためにあ
り、使われる世界。

ミストレイク候に伝えれば、どのような顔をされるだろう。

「ええ、……はい。いえ、女の方もおられますよ。ティラミスさん
と仲の良い女性もここにおいでですし」

店主が言う声が聞こえる。

「仲の良い……ってわしのことか？」

おばが首をかしげる。

「話しているのは父親かな」

「さて。母御かもしれぬな。夜遅くなっても家に戻らんとあれば、そりゃ心配するじゃろ」

それはそうか、と思いうなずく。その辺りは、どの世界でも同じようだ。

ティラミスの方を見れば、幸せそうに眠っている。家族に心配をかけていると言っのに。

「おい。おい、起きろ」

何となく苛立って、肩を揺する。

5 .

「うづん……、やだ、あと五分……」

むにゃむにゃ言いつつ、起きる気配がない。

「おい。母御が心配しているぞ。おまえ、家族に連絡をするぐらいは……」

「やゝだゝ……、まだねむいゝ」

揺さぶるが、起きない。

「おい、」

本格的に起こそうと思い、身を屈めた瞬間。

「起こさないでっ、てばあゝー！」

「がんっ！」

目から火花が散った。

「あ
「あ
「あ

周囲から、「あ」という声が上がった。店主も目を丸くしている。

がたんっ！

衝撃が腰に走り、自分が尻餅をついた事に気づく。

目の前には、拳を振り上げたティラミス。

そうして彼女は満足げな顔でまた、ぱったりとテーブルに突っ伏した。すうすうと寝息をたて始める。

店内が沈黙で満たされた。呆然として座り込んでいる自分の元に、じんが慌てた様子でやって来て、手を貸してくれた。

顎が痛い。

フォレシア国、ミストレイクの騎士、ウィルフレッド・ホーク。

十三、四の小娘に殴られ、倒される。

……不覚。

* * *

「どれだけ寝相の悪い娘なんだ……」

ひりひりとする顎に、店主とじんが湿布をしてくれた。ティラミスの家族とは、朝になって目がさめたら連絡をさせる、ということ
で話がついたらしい。

と言うか、平身低頭な様子で謝られた。わたしがティラミスが起
こそうとして、寝ぼけた彼女に殴られた様子が伝わっていたらしい。

ケータイとやらの道具から声だけが伝わってくるのは正直、不気
味だったが、ティラミスの母親らしい女性の声は、気遣いに満ちて
いた。

『うちの娘が、本当に、本当にすみません……っ！』

大丈夫だと言っておいた。ついでに、あまり叱ってやらないで欲

しいとも言っておいた。

妙な魔術師に絡まれたり、色々あったのだ。疲れて眠りもするだろう。

甘いと思うが、ローズと同じぐらいの歳という事もあり、どうも保護者の気分になってしまう。

やがて、集いもお開きになった。

店主の口上と共に、土産のドロップ。魔力を込めたものらしい。

人ならぬものたちも、人でありながら魔法に関わるものたちも、皆、それぞれに家路につく。

魔力が走り、光が走り……、静かになる。

「サー・ウィルフレッドには、これを」

店主が、何かを差し出した。

「なんだ？」

「テイラミスさんが持ってきた、ビタミンのタブレットです。警護役を頼みましたから、お礼に」

「薬物か。これは何の役に立つのだ」

「体の弱った者の体力を底上げします。怪我をした者の傷を、早く治す作用もあります」

「それはありがたい。いただく」

そう言うと、それとは別に、小さな容器も差し出された。

「怪我をさせてもしまいましたが……これも」

「これは？」

「傷薬です。破傷風はしやうふうを防ぎます」

ありがたくもらった。傷口から悪い風が入って腐るのは、誰でも恐怖だ。一度、手足が腐り出すと、後は切り落とすしか助かる方法はない。

腕の良い薬師くすりしがいるのなら別だが……。

「店主どのは、薬師でもあるのか？」

「いいえ。わたしは、この店主であるだけ。様々な世界のお客さまが、ここには集つどいます。だから、多少は知識を持つ。

ですが、それだけです。わたしはただ、それだけの者にすぎません」

そう言う店主に、「そうか」とだけ返した。

この店では、人も、人ならぬ者も、平和の内に集う。

その平和を実現している店主には、敬意を表しても良いとは思う

のだが、……それを言つと店主はまた、「自分はただの茶屋の店主だ」と言つのだらう。

*
*
*

ティラミスが目覚め、家族と連絡を取った。

それを見ながら、さて、わたしもそろそろ帰るか、と思う。

顎の痛みは取れた。殴られたとはいえ、女人の力だ。さほど……まあ。多少は痛かったが。さほどの事ではない。

わたしの顎を見て、不思議そうな顔をしていたが、話すほどの事ではないと判断した。

そうしていると、なぜか、マントを洗うと言い出された。良くわからん。

店主もおばも、じんまでもが笑っていたが……、

つんでれ、とは何なのだ？

* * *

店を出る。

通りを歩くと、ほどなくして静かな村に出た。夜明け前なので、薄暗い。土を固めた道と、家畜の糞尿の匂いが漂う。

見慣れた家々の並ぶ通りに確信する。城からやや離れたところにある、ネルの村だ。

ミストレイク領内であれば、どこにでもあるような小さな村だ。どこにでもある、わたしの世界の風景だ。

振り返るそこに、魔法小路はない。

不思議にきらめく灯の世界。魔法に満ちたあの場所は、消えていた。

いつも通りだ。

いつも通りの日常がまた、始まる。

短剣は失くしたが。マントも……いや、たぶん、どうにかして店主が届けてくれるだろう。

懐には、太陽のしずくのドロップ。心が暗闇に囚われた時には、これを飲めと店主に言われた。

候に献上しよう。

ティラミスの持ってきた、びたみん、とやらの薬と、傷薬。

それに、奥方たちへのお土産に、店主に頼んで見繕ってもらったクッキーやパイ。

けれど何より、候や奥方が喜ばれるのは……、あの一夜で出会った者たちとの、会話や出来事。あの場所の土産話だろう。

東の空が、明るくなり始めている。

ミストレイク城に向かい、わたしは歩き出した。

『その時のウィルフレッド』 F i n .

あとがき。

夏至の夜の不思議な時間。

ティラミスさん中心の話と、ウィルフレッドの視点から見たらどうだったのか、という事で書いてみました。ウィルさんは、本編、第二話の主人公。

本編ではまだ、二人は出会っていません。早く出会わせたいのですが。

最後、なぜウィルフレッドの顎に湿布があったのか。その理由は、ウィルフレッド視点でのみ出てきます。こういう事でした。

ちなみに彼は、ティラミスさんの年齢を、かなり下に見ています。もちろん勘違いです。

実際には、ティラミスさんは二十代なのですが、東洋人は若く見えるので……。

妹と同じぐらいだろうと思って、あれこれ世話を焼いていたのです。

そうして彼は、

ぼくねんじん
朴念仁。

です。

彼の母親は、早く所帯を持つて欲しいのですが、女性の噂らしきものもさっぱりない。で、何かの拍子にティラミス話を聞いて、

「平民でもなんでも良いから、早く嫁に！」

と思っているのですが。ウィルさんには全く通じていません。妹のローズも、

「お兄ちゃん、恋人ゲット！」

と応援しているのですが、これも全く通じていません。母親からそれとなく、相手の女性に指輪を、とか言われても、指輪がどうしたんだ、と一瞬、疑問に思って、そこで終わり。あとは、きれいさっぱり忘れてしまいます。

そういう人です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4014y/>

一夜の魔法亭 ～ただ茶屋番外編～

2011年11月14日22時12分発行